

ごん が い せき ぐん
恒川遺跡群

た なか くら がい と ち せき
(田中倉垣外地籍)

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

ごん が い せき ぐん
恒川遺跡群

た なか くら がい と ち せき
(田中倉垣外地籍)

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

序

今日、飯田市を代表する遺跡の一つとなっている恒川遺跡群の大規模な発掘調査は、昭和52から57年度にかけて一般国道153号座光寺バイパス建設に先立って行われました。この調査では、皇朝十二銭の一つである和同開珎銀銭や硯・帯金具といった特殊なものがみつき、ここが古代「伊那郡衙」跡ではないかとの推測がなされました。これを受けて、郡衙の実態解明のための重要遺跡範囲確認調査を昭和57年度以降、国・県の補助事業として実施するとともに、バイパス開通以後、沿線の開発が進むなかで、地権者や地元の皆様のご協力を得まして、随時発掘調査を実施してまいりました。

平成6年度の調査では、長野県内ではじめて「正倉」が確認され、恒川遺跡群が伊那郡衙として認識されることとなりました。

伊那郡衙の存在は、律令時代という新たな国家形成がなされていったなかで、この地がその一翼を担っていたということを示しています。

近年、官衙に関する発掘調査が増加し、研究もかなり進んできていると聞きます。恒川遺跡群の調査研究がこうした研究に寄与できることを期待しています。

さらに、地域の歴史を学ぶということが、ただ知識として覚えるというだけではなく、私たちが住むこの地の自然環境と人々がどのように関わり合ってきたのかを考える一つのよすがとなるように、文化財保護に携わる者として、文化財を地域の中で生かす努力をしていかなければとあらためて思う次第であります。




最後になりましたが、文化財保護に深いご理解をいただき、ご協力いただきました地権者をはじめとする関係者の皆様に深く感謝し、刊行の辞とさせていただきます。

平成20年3月

長野県飯田市教育委員会

教育長 伊 澤 宏 爾

例 言

1. 本書は、店舗建設に先立って実施された、飯田市座光寺恒川遺跡群の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市教育委員会の直営事業として実施した。
3. 調査は、平成18年度に発掘調査、平成19年度に整理作業及び報告書刊行を行った。
4. 調査実施にあたり、調査区グリッドの設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づくものであり、基準点測量は有限会社 M2クリエイションに委託した。
5. 発掘作業及び整理作業にあたり、作業の簡略化を図るために、遺跡名に略号を用いている。さらに、恒川遺跡群の場合は、遺跡が広範囲にわたるため、地籍ごとの略号に地番を付している。当概調査地点は、田中倉垣外地籍にあたり、略号KURに地番4604-2を付している。遺構については、地籍ごとに連番を付している。
6. 本書では、遺構には以下の略号（竪穴住居址—SB、土坑—SK、集石—SI、溝址—SD、方形周溝墓—SM）を使用している。
7. 調査区の設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいている。今次調査地点は、基準メッシュ図LC-75 8-22に位置する。
8. 本書の記述は遺構ごとに行い、遺構・遺物図版及び写真図版は巻末に一括した。
9. 土層の色調については、『新版標準土色帖』1998年度版の表示に基づいて示した。
10. 本書の遺構図は、数字は遺構については検出面から、住居址内については床面からの深さ（単位cm）を示す。アミ掛けについては、は焼土、は貼床、は炭化物の範囲を示す。断面図の「P」は土器、「S」は石を示す。
11. 石器実測図の表現については、「S」は研磨を示す。
12. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により、澁谷恵美子が行った。
13. 本書の執筆および編集は、澁谷が行った。全体の総括を山下誠一が行った。なお、遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真は西大寺フォト 杉本和樹氏に委託した。
14. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目次

本文目次

序	
例言	
目次	
第I章 経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織	1
第II章 遺跡の環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 歴史環境	3
第III章 調査結果	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺構	7
(1) 竪穴住居址(SB)	7
(2) 土坑(SK)	12
(3) 集石(SI)	13
(4) 溝址(SD)	14
(5) 方形周溝墓(SM)	14
第3節 遺構外出土遺物	14
(1) 土器	14
(2) 石器・石製品	14
第IV章 まとめ	15
抄録	61

図版目次

挿図1	恒川遺跡群位置図	2
挿図2	調査位置及び周辺遺跡位置図	5
挿図3	調査区全体図	6
挿図4	基本層序	7
第1図	SB318・同カマド	19
第2図	SB319・320・322カマド・323炉址	20
第3図	SB324カマド・326・同カマド	21

第4図	SB325	22
第5図	SB327・同カマド・333	23
第6図	SB327・333遺物出土状況	24
第7図	SB328・同カマド・329	25
第8図	SB328・329・332遺物出土状況	26
第9図	SB330・同カマド	27
第10図	SB331・同炉址・332・同カマド	28
第11図	SK94~102・SD40	29
第12図	SI43~47	30
第13図	SM07	31
第14図	SB318・320出土遺物	32
第15図	SB324・325・326・327出土遺物	33
第16図	SB328・329出土遺物	34
第17図	SB330・332・333出土遺物	35
第18図	SK94・100・SI43・SM07出土遺物	36
第19図	遺構外出土遺物	37
第20図	石器・石製品・鉄製品	38
第21図	遺構外出土遺物	39

写真図版目次

図版1	調査区全景	41
図版2	SB318	42
図版3	SB319・320	43
図版4	SB322・323	44
図版5	SB323・324	45
図版6	SB325	46
図版7	SB326	47
図版8	SB327	48
図版9	SB328・329	49
図版10	SB328・329・332・SI47	50
図版11	SB330・331	51
図版12	SB333	52
図版13	SK94・95・97~102	53
図版14	SI43・44・45・46・SM07	54
図版15	SB318・319・320・327・329出土遺物	55
図版16	SB328・333出土遺物	56
図版17	SM07出土遺物	57
図版18	SK98・SI43・遺構外出土遺物	58
図版19	遺構外出土遺物	59

第 I 章 経 過

第 1 節 調査に至るまでの経過

恒川遺跡群は、昭和52年に実施された緊急発掘調査により、「古代伊那郡衙」推定地とされて以来、昭和57年度から文化庁・長野県の補助を受け、伊那郡衙としての実態把握のため、範囲確認調査を継続的に実施している。特に、平成6・7年度に薬師垣外地籍において正倉の一部とみられる建物址群が確認されたことで、郡衙としての様相が明らかになりつつある。また、郡衙としてだけでなく、縄文時代以降の集落遺跡としても知られており、市内でも重要な遺跡の一つである。

平成18年7月18日付で、飯田市座光寺4604-2他における店舗建設にかかわる埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該工事計画地は、恒川遺跡群の田中倉垣外地籍に所在するが、同地籍内ではこれまでも範囲確認調査や緊急発掘調査が実施されており、同遺跡群内でも特に遺構が密集しているところであり、恒川遺跡群の中においては主に集落域として位置付けられるところである。

前述のような状況であることから、その保護について、開発者側と飯田市教育委員会とで協議し、本発掘調査を実施することとなった。

第 2 節 調査の経過

発掘調査は、平成18年8月28・29日に重機を入れて表土剥ぎを行い、同月30日に基準点測量を実施し、同日作業員を入れて発掘調査を開始した。遺構の掘り下げと実測を順次行い、調査区の全景写真を撮り、11月1日に現地での作業を終了した。

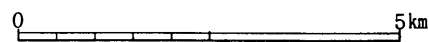
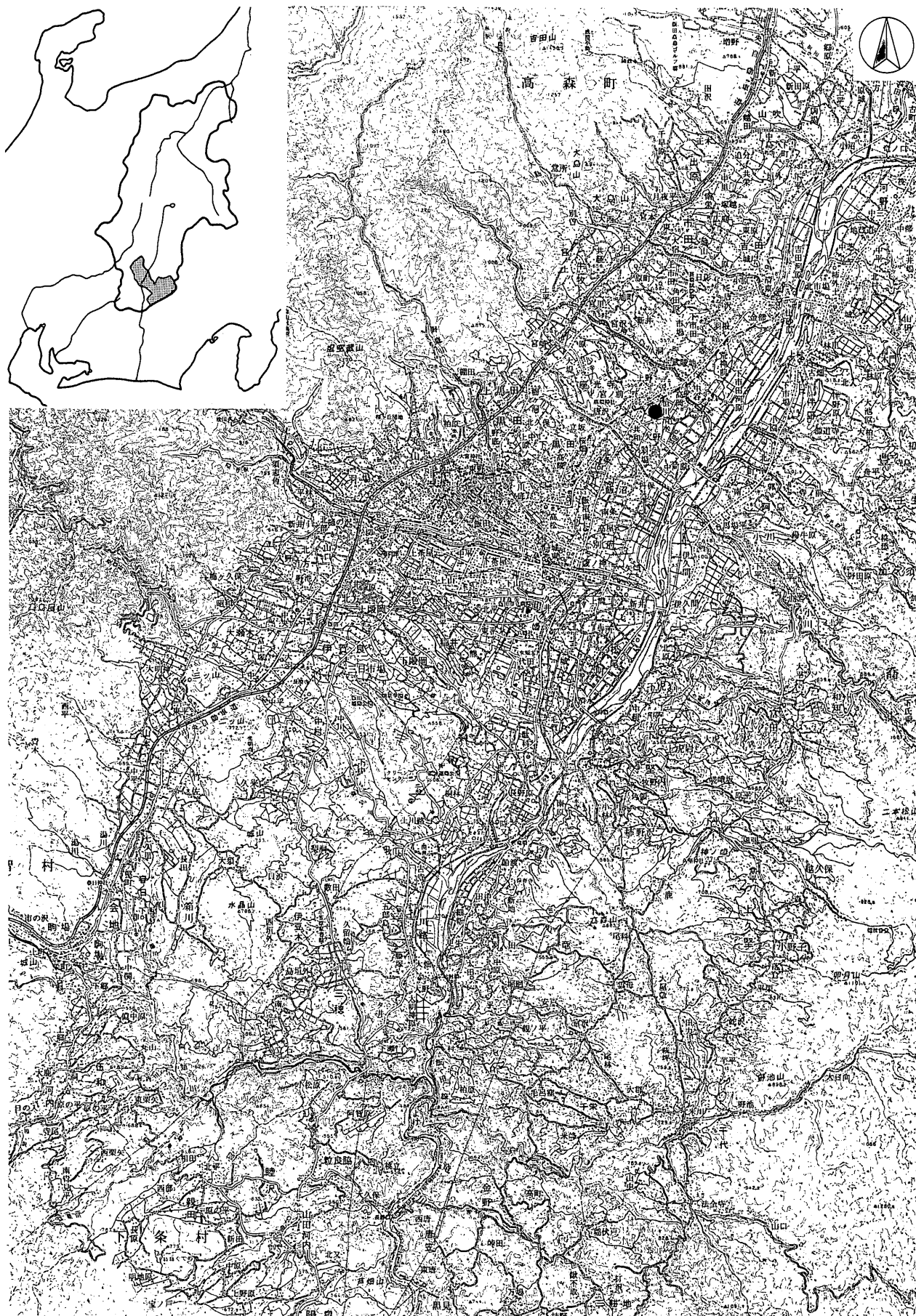
第 3 節 調査組織

〔調査主体者〕

教 育 長	伊澤宏爾						
総 括	小林正春（～平成18年度）	宇井延行（平成19年度～）					
調査担当者	澁谷恵美子	羽生俊郎					
調 査 員	馬場保之（～平成18年度）	山下誠一（平成19年度～）	下平博行	坂井勇雄			
作 業 員	伊東裕子	金井照子	木下力弥	小島康夫	佐々木政充	杉山春樹	
	竹本常子	田中博人	中山敏子	中村地香子	服部光男	樋本宣子	
	福沢トシ子	松下省三	松本恭子	宮内真理子	森藤美知子	吉川悦子	

〔事務局—飯田市教育委員会〕

教育次長	中井洋一（～平成18年度）	関島隆夫（平成19年度～）					
生涯学習課長	小林正春（～平成18年度）	宇井延行（平成19年度～）					
” 文化財保護係長	馬場保之（～平成18年度）	山下誠一（平成19年度～）					
” 文化財保護係	宮澤貴子	澁谷恵美子	下平博行	坂井勇雄	羽生俊郎		



挿図1 恒川遺跡群位置図

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

長野県飯田市は、県南部を南北に並走する伊那山脈と木曾山脈とに挟まれた伊那谷の南端に位置し、天竜川はその中央部を南流する。伊那谷の地形は、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴う盆地と大きな段丘崖とによって構成された複雑な段丘地形であり、さらに天竜川の浸食によって形成された河岸段丘とによって特徴づけられている。この段丘は、『下伊那の地質解説』によると火山灰土の堆積を基準として高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの5段階に編年されている。

恒川遺跡群がある飯田市座光寺地区は天竜川右岸にあり、市街地の北東4km、飯田市の北端部に位置している。南は飯田市上郷地区となり、北は下伊那郡高森町、東は天竜川を挟んで同郡喬木村と境を接する。山間部を除いた地形は、南北にのびる断層によって形成される段丘崖を境として、俗に上段と^{うわだん}呼ばれる洪積層の標高600m～470m前後の中位段丘及び低位段丘Ⅰと^{しただん}下段と^{うわだん}呼ばれる沖積層の低位段丘Ⅱとに大別される。

恒川遺跡群は、地形的には低位段丘Ⅱ飯沼面と別府面にあたる。今次調査地点は、恒川遺跡群の中央部にあたり、標高430m前後で、北西から南東に向かって低く、緩やかに傾斜している。段丘崖直下に連続して存在する湧水が、湿地帯を形成しており、恒川遺跡群で確認される集落の主たる生産域となっていたとみられる。特に、「恒川清水」といわれる湧水池があり、利水的にも良好な場所といえる。

第2節 歴史環境

座光寺地区の遺跡立地には地形的特徴が大きく関わっており、上段と下段で遺跡の分布や性格が異なる。上段には縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、特に山麓部には縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍蔵の調査で知られた大門原遺跡等、また、扇端から上段の段丘端部にかけては弥生時代後期の標式遺跡である座光寺原・中島遺跡がある。下段には縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代ごとに立地が若干異なる。

旧石器時代の遺跡は上段においては確認されていないが、下段では終末から縄文時代草創期にかけての遺跡として、新井原・石行遺跡で有舌尖頭器が出土している。

縄文時代には、上段では早期の遺跡として、押型文土器が出土した宮崎A遺跡・米の原遺跡・大門原遺跡がある。中期の発掘調査例は多くはない。中期初頭の竪穴住居址と土器群が出土した大久保遺跡、中期中葉から後葉の大集落とみられる大門原遺跡のほか、中期後葉では宮崎B遺跡・座光寺原遺跡・宮崎南原遺跡がある。後・晩期は断片的な資料だが、後期前葉の注口土器等が出土した大笹遺跡がある。

また、南大島川沿いにある大井遺跡では詳細時期不明であるが3基の集石炉が調査されている。さらに、南大島川の浸食により形成された谷に面した段丘上にもいくつかの遺跡が存在する。美女遺跡では断片的ではあるが、草創期の遺構・遺物が確認されているほか、早期後葉から中期初頭まで断続的に集落が営まれている。特に早期では立野式期の集落が調査されており、当地方における縄文社会確立期の姿を明らかにする上で重要な遺跡であるといえる。これ以外では、半の木遺跡で早期の断片的な資料が

得られている。晩期終末では美女遺跡・半の木遺跡で遺構が確認されている。

下段では、恒川遺跡群で早期・前期の断片的な資料がある。中期では新井原・石行遺跡で中期後葉の大規模集落の一部が調査されており注目される。後期から晩期前半にかけての様相は明らかでない。晩期終末では、新井原・石行遺跡で竪穴住居址と土器群が確認されている。

弥生時代では、上段においては中期の遺跡はほとんど知られていないが、後期になると遺跡数が急増し、高燥な台地上へ集落展開する。人口増と生産手段の発達、畑作と稲作による複合農業を生産基盤としたことが背景として考えられる。後期前半では前期の標式遺跡である座光寺原遺跡や大門原B遺跡が、後半になると中島遺跡・宮崎A遺跡等の調査例がある。

下段では、中期前半は断片的な資料があるものの、これまでに遺構は認められていない。後半では、恒川遺跡群で40軒以上の竪穴住居址が確認されている。後期前半は遺構の分布が稀薄であり、居住空間が限定されていた可能性が指摘されている。後半になると恒川遺跡群のほぼ中心部に位置する田中倉垣外地籍で密な分布がみられる。

古墳時代では、上段においては断片的な資料が得られているのみであり、古墳の数も下段に比べると少ない。しかし、段丘端部には前方後円墳の北本城古墳や未調査ではあるが浅間塚古墳がある。前者は当地方における初期横穴式石室を有し、後者は時期的に古く遡る可能性がある。また、北本城古墳と同種の石室を有し、銀製垂飾付耳飾を出土した畦地1号古墳など円墳群が北側に集中する。

下段では、前期には恒川遺跡群において前時代から続く集落展開がみられる。また、半の木遺跡で前期の住居址が確認されている。恒川遺跡群では中・後期になると分布域も拡大するが、後期末には新屋敷・恒川B地籍など北側に分布が偏る。古墳の数は竜丘・松尾地区に次いで多く、下段においても北側に集中し、集落・生産域と隔離された立地となる。前期古墳は未確認であるが、中期になると新井原・高岡古墳群中にある帆立貝形古墳の新井原12号古墳に近接する4号土壙から馬具を装着した馬歯骨が出土し、また新井原2号古墳でも3基の馬の墓が確認されるなど、馬とのかかわりが強い集団の存在が明らかになってきている。後期になると当地方最大級の規模を有する前方後円墳の高岡1号古墳が築造される。円墳では老丈藪3号古墳・ナギジリ1号古墳等が調査されているほか、石塚1・2号古墳など、段丘崖下の傾斜地や中小河川に面した傾斜地に小規模単位の円墳群がみられる。

奈良・平安時代は、上段では断片的な資料が得られているのみであり、現状では古墳時代以降は散在的に小規模な集落があったとみられる。

下段では、恒川遺跡群は「伊那郡衙」として知られている。政庁域等は特定されていないが、薬師垣外地籍で正倉が確認されている。新井原・石行遺跡では灰釉陶器蔵骨器を伴う火葬墓群が調査されており、官人層の墓所とも考えられている。また、平安時代の遺構から押出仏が出土している。

中世になると上段では、段丘突端に北本城城跡・南本城城跡・浅間砦が築かれ、小河川に開析された複雑な地形を生かした立地となっている。北本城城跡は調査により、4つの曲輪を主体とした居城的な城郭であるとされ、これに対して南本城城跡は、現在でも良好に当時の姿をとどめている城跡であり、防御施設の整った防御専門の城郭で、その性格からも北本城城跡との関連が考慮されている。

下段では新井原・石行遺跡で土葬墓・火葬墓が多くあり、古墳時代以降連続してこのあたりが墓域であった様子がうかがえる。

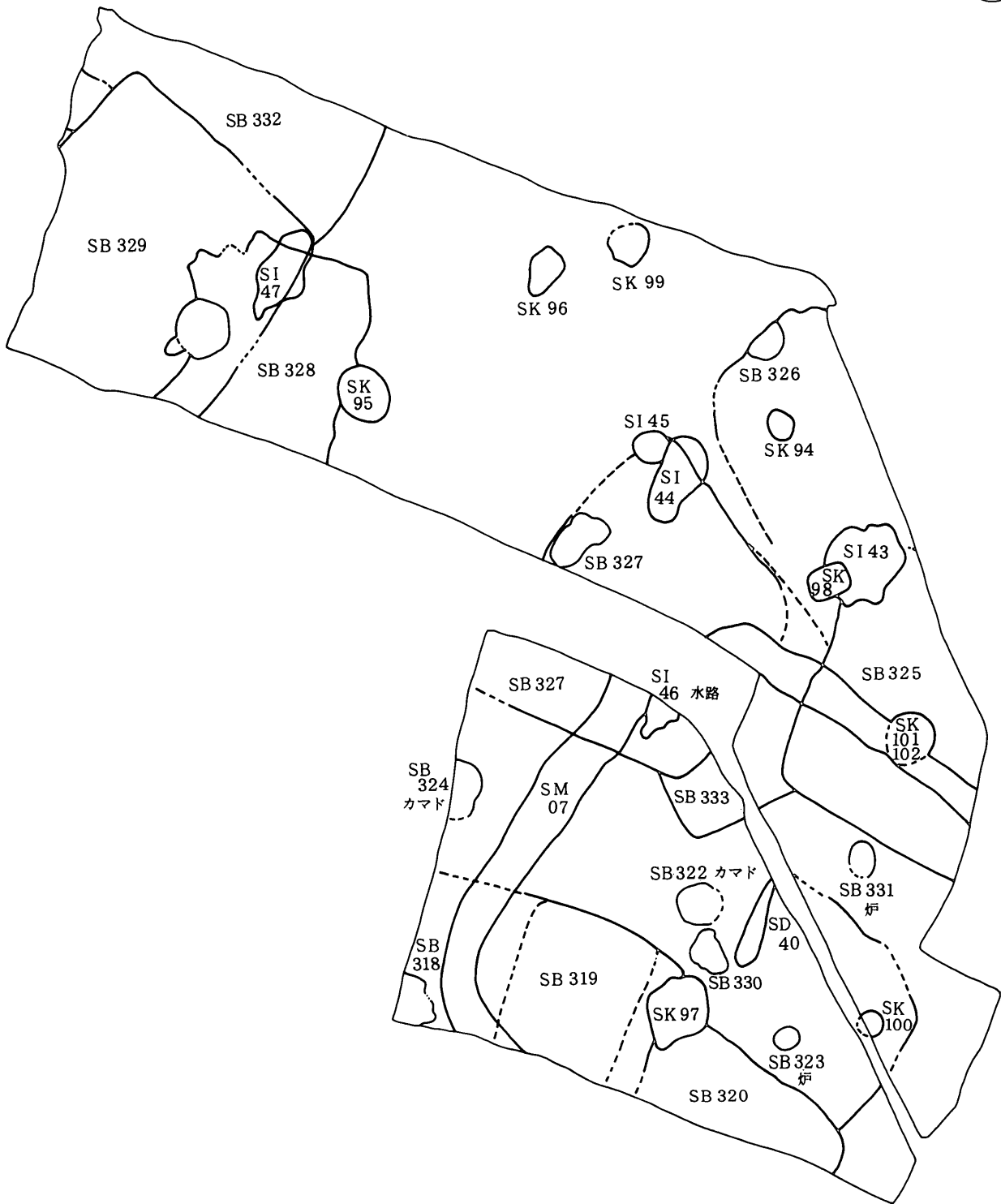
近世では、大門原Dで火葬墓・土葬墓5基が調査されている。



挿図2 調査位置及び周辺遺跡位置図

DU08 | DV09

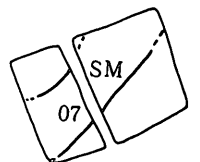
DU16 | DV17



DG08 | DH09



DG16 | DH17



挿図3 調査区全体図

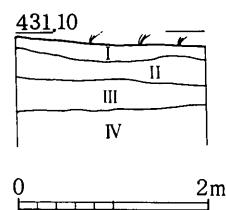
第三章 調査結果

第1節 基本層序 (挿図4)

今次調査地点は、地形的には北から南にかけて低く緩やかに傾斜する。

平成元年度に実施した西側隣接地での発掘調査(範囲確認調査)では、洪水堆積層(「未満水」という)が10~40cm確認されているが、今回の調査箇所では後世の上部削平および造成により洪水堆積層は確認されない。しかし、各調査時の遺構確認面(地山)の高さを比べると、おおむね430.2m前後となり、地形的にはほぼ平坦である。

今回の調査では東側で10~20cmの造成土の直下で遺構や遺物包含層が確認され、東側では造成土の下に耕土(基本層序I層)―黒褐色土(基本層序II層)―黒色土(基本層序III層)―地山(基本層序IV層)の堆積がみられる。III層は遺物包含層となるが、断面観察ではこの層中で遺構が確認できる。本来はIII層で遺構検出ができることが望ましかったが、結果的には地山面での検出となった。このIII層は、平成元・13年度の調査の基本層序で遺物包含層とされる暗褐色土層に相当するとみられる。



- I 耕土
- II 10YR 2/3 黒褐色土 SIC 粘性なし しまりなし
- III 10YR 2/1 黒色土 SIC 粘性なし しまりなし (遺物包含層)
- IV 地山

挿図4 基本層序

第2節 遺 構 (挿図3)

(1) 竪穴住居址 (SB)

①SB318 (第1・14図 図版2・15)

遺 構 DK13を中心に1/2程度を検出した。SB322・324・SM07を切り、SK97に切られる。

規模は確認できた範囲で、東西方向5.3×南北方向3.6m、主軸方向N75° Eで隅丸方形を呈する。堅くタタキ締められた部分や遺物の出土状態、カマド、断面観察から床面および住居址の範囲を把握している。堅い貼床の厚さは3cm程度である。壁面は検出面から床面まで10cm程度で、壁面はやや傾斜して立ち上がる。周溝は確認できず、柱穴は1箇所(P1)確認したのみである。

カマドは、住居址の東側で検出した。カマド奥から煙道にかけては調査区外となる。本址のカマドが造成土の直下にあったため、造成および重機による表土剥ぎの際に上部が削平されている。カマド前面の床面には1m位の範囲に炭化物と焼土が散在しており、廃棄の際にカマドを壊している可能性がある。石芯粘土カマドで、確認した規模は1.0×0.8mである。

遺 物 カマド内から土師器(杯・甕)(第14図―1・4~7)が出土している。炊き口付近からは土師器(甕)一個体(同図―6)が横倒しの状態で出土しており、中には焼土・炭化物が入っていた。カマドの脇からは土師器(小型甕)(同図―3)が出土している。住居址覆土からは土師器(内黒杯)(同図―2)のほか、須恵器(甕)(同図―8)の破片が出土している。

時 期 出土遺物から古墳時代後期(6世紀前半)とみられる。

②SB319 (第1・2・20図 図版3・15)

遺 構 DK13を中心に検出した。検出時に堅くタタキ締められた部分を確認し、当初はSB318のカマドに伴う床面と考えたが、断面観察によりSB318の上に貼床したものと判断した(第1図B-B')。

確認した堅い床面の範囲は3.0×2.6mである。北側でわずかに確認できた壁面は10cm程度である。確認したのが床面のみであるため、住居址の規模・主軸方向は不明である。

遺 物 本址に伴うと考えられるものとして、堅い床面上から出土した石製紡錘車(第20図—3)がある。このほかは土師器・須恵器小破片のみである。

時 期 遺物が少なく時期を特定できない。SB318との関係から古墳時代以降とみられる。

③SB320 (第2・14・20図 図版3・15)

遺 構 DJ15を中心に全体の1/3程度を検出した。SB322・323・330を切り、SK97に切られる。隣接するSB318とは平面的には新旧関係を明確に把握することができなかった。そのため、西側壁は推定である。断面観察ではSB318が切っているようにみえるが、出土遺物からはSB320の方が新しい。

規模は確認した範囲で4.3×1.9m、主軸方向は長軸でN35° Eの隅丸方形を呈する。壁面は検出面から床面まで20cm程度で、壁面はやや傾斜して立ち上がる。周溝・柱穴は確認できなかった。

遺 物 本址の東側隅で土師器(黒色土器)・須恵器(杯身)・鉄製紡錘車・不明鉄製品・砥石(第14図—9・10、第20図—1・2・11)がまとまって出土しているが、床面直上からのものではない。

時 期 出土遺物から平安時代前期(9世紀中葉)とみられる。

④SB322 (第2図 図版4)

遺 構 DL14を中心にカマドのみを検出した。SB318・320に切られる。カマドの周囲に炭化物・焼土の散布がみられたが、SB330と重複し、本址の範囲を把握することはできなかった。

カマドは上部が削平されており、袖石の一部とみられる石と火床の一部が残っていた。石芯粘土カマドとみられるが、カマドの原形は留めていない。残存規模は0.75×0.75mである。

遺 物 土師器・須恵器の小破片のみである。

時 期 遺物が少なく時期を特定できない。切り合い関係からは古墳時代とみられる。

⑤SB323 (第2・21図 図版5)

遺 構 DK15を中心に検出した。確認したのは炉址のみである。SB320に切られる。炉址の上で一部確認した貼床は、SB322もしくはSB330の床面の可能性がある。炉址のみのため規模は不明である。

炉址内からは焼土・炭化物が検出されたのみで、地床炉とみられる。規模は0.58×0.45mである。

遺 物 炉址の周辺から弥生土器片や有肩扇状形石器(第21図—10)が出土しているが、本址に帰属するものであるか不明である。

時 期 出土遺物から特定し難いが、弥生時代以降の可能性はある。

⑥SB324 (第3・15図 図版5)

遺 構 DM12を中心に検出した。西側が調査区外となり、カマドの一部を確認したのみである。

SB318に切られる。本址カマドの東側にはSM07があるが、SM07の検出面が本址カマドから想定される床面よりも高いことから、本址の中心は調査区外にあたる西側の方にあると考えられる。カマドのみのため、本址の規模は不明である。

本址のカマドは造成土直下で検出されたため、造成及び表土剥ぎの際に上部が削平されている。袖石の一部とみられる石と火床の一部が残っていた。石芯粘土カマドとみられるが、断面観察からみても原形は留めておらず、廃棄の際に壊された可能性がある。確認した範囲は1.13×0.64mである。

遺物 カマド内から土師器（甕）（第15図—3）が、覆土から土師器（杯）・須恵器（杯身）（同図—1・2・4）が出土している。

時期 遺物は少ないが、出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

⑦SB325（第4・15図 図版6）

遺構 DN16を中心に全体の1/3程度を検出した。SM07・SK102の上に貼床している。SB331・333を切り、SK101・SI43に切られる。隣接するSB326とは断面観察からは切り合い関係はない。

本址は、方形にめぐる周溝とその内側の堅くタタキ締められた面を床面として把握した。壁は確認できなかったが、周溝による規模は南北方向で5.2mを測る。主柱穴は確認できない。床面は地山を掘り込み、貼床をしている。床面は堅いが凹凸があり、周溝寄りがやや高くなっている。この貼床は断面観察（第4図B-B'）によると、約10cmの厚さがあり、掘り方は版築状に層をなしている（3～11層）。各層は黒褐色土・黄褐色の砂質土・黄褐色の粘質土の互層をなしている。さらに、貼床下の層には小礫が含まれている。住居址の掘り方は周囲が深く、中央部がやや浅くなっている。また、床下の一部に凹凸のある掘り込みが確認できるところがあり、住居址掘り方にかかわるものともみられる。本址の周溝は、幅25～35cm、竪穴住居址の周溝としては比較的深く17～19cmある。周溝内には周溝の西側で浅い掘り込みが確認できる。

貼床が版築状をなすことから、通常の竪穴住居址とは異なる構造の建物の可能性が考えられる。

遺物 覆土からであり、確実に伴うか確定できないが、須恵器（杯蓋・杯身・盤・壺）（第15図—5～9）が出土している。

時期 出土遺物から奈良時代（8世紀前半）の可能性がある。

⑧SB326（第3・15・20図 図版7）

遺構 DP16を中心に全体の1/2を検出した。SK94・SI43に切られる。

本址は、北西側で壁が確認できるが、それ以外は周溝により規模を把握した。南北方向で4.3mになる。主柱穴は確認できない。堅くタタキ締められた貼床があり、特にカマド前面が堅い。住居址中央の穴（P1）は本址に伴うとみられる。底部に柱の痕跡があり、柱掘り方は意図的に埋められたような状態であった。

北西側壁で確認された焼土・炭化物から、カマドの存在が想定される。掘り下げたところ火床を検出したが、石等は残っておらず、構造は不明である。掘り方の範囲は0.6×0.43mである。

遺物 出土遺物は破片で量も少なく、図化できるのは土師器（高杯）（第15図—10）と覆土から土玉（第20図—4）が出土している。

時期 出土遺物が少なく、時期の特定ができない。古墳時代以降の可能性はある。

⑨SB327 (第5・6・15・20図 図版8・15)

遺構 DO14を中心に全体を検出した。SB333を切り、SM07の上に貼床している。SI44・45・46に切られる。

カマドは把握していたが、堅い床面を確認できるのはカマド周辺のみであり、当初水路を挟んだ反対側との関係を平面的には明確に把握できなかったこともあり、住居址の範囲についてはやや疑問が残る。断面観察(第5図C-C')で把握した規模は6.0×5.0m、主軸方向はカマドからN53°Wになるとみられる。柱穴は1本(P1)を確認したのみである。

カマドは北西側で確認した。袖石が残存し、石芯粘土カマドとみられる。規模は0.9×0.5mである。

遺物 カマド内から土師器(壺・甑)(第15図—12・13)が出土しており、P1の上および周囲から土師器(壺)(同図—11)が出土している。石器に敲打器(第20図—7)がある。

時期 出土遺物から古墳時代後期(6世紀後半)とみられる。

⑩SB328 (第7・8・16図 図版9・10・16)

遺構 DQ10を中心に検出した。SB329の上に貼床している。SK95・SI47に切られる。

住居址として確認できたのは、カマド及び堅くタタキ締められた床面の一部のみであったため、規模・主軸方向は不明である。貼床の厚さは約3cmである。

カマドは西側で確認した。石芯粘土カマドである。規模は1.1×1.1m、両袖石の位置からカマドの主軸方向はN41°Wとなる。火床は厚く残っていた。

遺物 遺物はカマド及び堅い床面の範囲から出土したものを本址に伴うものとした。カマド内から土師器(内黒杯・高杯・壺)(第16図—2~5)が、カマド周辺から土師器(内黒杯・甕)(同図—1・7)・須恵器(高杯)(同図—8)が、やや離れて土師器(壺)(同図—6)が出土している。

時期 カマドの出土遺物から、古墳時代後期(6世紀後半)とみられる。

⑪SB329 (第7・8・16図 図版9・10・15)

遺構 DR09を中心に全体の3/4程度を検出した。SB332・SI47に切られる。

本址の上にSB328が貼床しており、南西側は調査区外となるが、3方の壁が確認できた。北西・南東方向で5.3m、南西・北東方向で5.75mになる。主軸方向は北西・南東方向でN54°W、隅丸方形を呈する。壁は北側が0.7m程度でほぼ垂直に立ち上がる。支柱穴は1基(P1)確認したのみである。周溝は北東壁際で確認したほか、支柱穴の脇でも検出した。焼土が各所で認められる。

本址の西隅で貼床と焼土を確認し、カマドの存在が想定されたが把握できなかった。

貼床下からは弥生土器等が出土し、別の住居址の存在が想定されたが、遺構は確認できなかった。

遺物 床面から土師器(内黒杯・甕)(第16図—9~12)、覆土から須恵器(甕)(同図—13)が出土している。

時期 出土遺物から古墳時代後期(6世紀前半)とみられる。

⑫SB330 (第9・17・20図 図版11)

遺構 DK16を中心に検出した。SB331を切る。SB320・SK97・SK100・SD40に切られる。

カマド及び4本の支柱穴(P1～P4)を確認したが、壁は東側の一部を確認したのみであり、正確な規模は把握できていないが、柱穴等から一辺4～5mの規模になると推定される。主軸方向はN54°W。4本の支柱穴の横にはそれぞれ同様の小ピットがあり、建替えがあったことも考えられる。

カマドは北西側で確認した。掘り方で石の抜き取り痕跡が確認されたため、本来は石芯粘土カマドとみられる。検出時に石はなく、壊されている。規模は0.9×0.6m。

遺物 カマドからは土師器片が出土しているのみである。覆土から土師器(内黒杯)・須恵器(杯身)(第17図—1・2)のほか、土玉(第20図—5)が出土しているが、本址に確実に伴うか明確ではない。

時期 確実に本址に伴う遺物がなく、時期の特定が難しいが、古墳時代(6世紀代)とみられる。

⑬SB331 (第10図 図版11)

遺構 DL16を中心に検出した。SB325・330に切られる。確認できたのは炉址と床面の一部であり、規模・主軸方向は不明である。

炉址は地床炉で、規模は0.4×0.4mである。

遺物 炉址内からわずかに土器片が出土している。

時期 遺物がなく、時期の特定ができない。

⑭SB332 (第8・10・17図 図版10)

遺構 DS10を中心に検出した。調査ではSB329の方が新しいと判断し、先行して掘り下げたため本址の全体を把握することができなかった。本址の床面には焼土・炭化物があったが、その延長がSB329の方にも広がっていた(第8図)ことから、本址はSB329の上に貼床していると考えられる。

北側と西側は調査区外になるため、規模は不明であるが、周溝および床面の状態から一辺6m程度の規模、主軸方向はN72°Wになるとみられる。床面は地山面を掘り込んでいる。全体に堅くタタキ締められた貼床となっているが、特にカマド前面が堅い。床面上には焼土・炭化物が散布している。

カマドは西側で確認した。カマド上部は後世の造成により削平されているが、袖の一部と火床が残っていたことから、おおよその規模は幅1.1mになる。カマドの下に周溝が確認できることから、カマドが付け替えられている可能性がある。

遺物 カマドの火床上から土師器(壺・甕)(第17図—4～6)、カマド下で確認した周溝内から須恵器(高杯)(同図—7)、覆土から土師器(杯)(同図—3)が出土している。

時期 カマドの出土遺物から古墳時代後期(7世紀代)とみられる。

⑮SB333 (第6・17図 図版12・16)

遺構 DM15を中心に1/3程度を検出した。SM07の上に貼床し、SB325・327に切られる。SB327に北側半分を切られており、北側隅の一面で堅い床面と遺物を検出したが、南側の壁は明確に把握できなかった。推定規模は約4mである。支柱穴は確認できなかった。

遺物 北側隅から、土師器（杯・内黒杯・壺・甕）（第17図—8～12）が出土している。

時期 出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

（2）土坑（SK）

①SK94（第11・18図 図版13）

DQ15を中心に全体を検出した。SB326を切る。規模は、0.62×0.49m、深さは0.14mの楕円形を呈する。SB326に伴うものと考えられたが、SB326床面よりも上の高さで検出されたことから別の遺構とした。土坑の中央に胴部のみの土師器（甕）（第18図—1）が据えられていたが、覆土中に焼土・炭化物はなく、炉址ではないとみられる。性格は不明である。遺物がごく一部のため、時期を特定できない。

②SK95（第11図 図版13）

DQ11を中心に全体を検出した。SB328を切る。規模は、1.1×1.0m、深さは0.45mの楕円形を呈する。性格は不明である。土師器（杯片等）がわずかに出土したのみで、時期を特定できない。

③SK96（第11図 図版13）

DR13を中心に全体を検出した。規模は0.98×0.62m、深さ0.37～0.94mの不整楕円形を呈する。性格は不明である。覆土からは弥生土器・土師器・須恵器が出土しており、時期を特定できない。

④SK97（第11図 図版13）

DK14を中心に全体を検出した。SB318・320・330を切る。規模は1.62×0.78m、深さ0.18～0.3mの不整形を呈する。性格は不明である。覆土から土師器破片が出土しているが、時期を特定できない。

⑤SK98（第11・20図 図版13）

DO15を中心に全体を検出した。SI43に切られる。規模は0.83×0.67m、深さ0.56mで隅丸長方形を呈する。長軸方向はN66° Eである。壁面はほぼ直に立ち上がる。覆土中に炭化物が堆積しており、意図的に埋められたようにもみられる。性格は不明である。覆土から打製石斧（第20図—8）、土師器・須恵器破片が出土しているがいずれも小片であり、時期を特定できない。

⑥SK99（第11図 図版13・18）

DR14を中心に全体を検出した。規模は0.8×0.72m以上、深さ0.25～0.43mで不整形を呈する。部分的に底部に穴状の掘り込みがある。性格は不明である。覆土から土師器（甕・杯等）の破片が出土しているがいずれも小片で、時期を特定できない。

⑦SK100（第11・18図 図版13）

DK16を中心に全体の2/3を検出した。SB330を切る。規模は0.53×0.36m以上、深さは0.05mで円形を呈する。底部から小礫と土師器（内黒杯）が出土した。壁は緩やかに立ち上がる。性格は不明である。底部から土師器（内黒杯）（第18図—2）が出土している。出土遺物から古墳時代とみられる。

⑧SK101 (第11図 図版13)

DN16を中心に全体を検出した。複数の遺構と切り合っているため、平面的に全体を把握できなかった。掘り下げた際の断面観察により、SB325・SK102・SM07を切るとみられる。規模は0.94m、深さは0.45mで不整形を呈する。覆土は暗褐色土で炭化物が混じる。性格は不明である。覆土から土師器・須恵器破片が出土しているのみで、時期を特定できない。

⑨SK102 (第11図 図版13)

DN16を中心に全体を検出した。SB325が上に貼床している。SM07を切り、SK101に切られる。規模は1.06×0.97m、深さは0.68mの円形を呈する。内部は袋状になっている。覆土の色調はブロック状の黄褐色土が混じる暗褐色土であり、意図的に埋め戻された可能性がある。覆土から土師器破片が出土しているがいずれも小片であり、時期を特定できない。

(3) 集石 (SI)

①SI43 (第12・18図 図版14・18)

DO16を中心に全体を検出した。SB325・326・SK98を切る。当初は、住居址に伴う編物石ともみられたが、量が多く2つの住居址にかかっていることから集石とした。南北1.8×東西1.5mの深さ0.15～0.12mの浅い掘り込みの上に石が散在する。石はいずれも自然石で大きさは10～20cmで、規則性はみられない。性格は不明である。石の間より土師器破片・須恵器(杯蓋)(第18図—3)が出土している。杯蓋の下からは炭化物が確認された。出土遺物から奈良時代(8世紀前半)とみられる。

②SI44 (第12図 図版14)

DP14を中心に検出した。SB327・SI45を切る。南北1.45mの範囲に石が散在する。石はいずれも自然石で、約30cmの大型のものもあるが、10cm前後の小型の石が北側に集中している。性格は不明。出土遺物はなく、時期不明。

③SI45 (第12図 図版14)

DP14を中心に全体を検出した。SB327を切り、SI44に切られる。南北0.3×東西0.5mの範囲に集中している。石はいずれも自然石で大きさは15～20cmである。性格は不明。出土遺物はなく、時期不明。

④SI46 (第12図 図版14)

DN14を中心に全体を検出した。SB327を切る。南北0.55×東西0.4mの範囲に集中している。石はいずれも自然石で大きさは15～20cmである。石の下からは長軸方向で規模0.8m以上、深さ0.1mの浅い掘り込みを確認したが、石の方が高い位置から検出されており、両者が伴うものか確定できない。性格は不明。出土遺物はなく、時期不明。

⑤SI47 (第12図)

DR10を中心に全体を検出した。SB328・329を切る。南北1.8×東西0.8mの範囲に散在している。石はいずれも自然石で大きさは10～20cmである。性格は不明。鉄が出土。時期不明。

(4) 溝址 (SD)

①SD40 (第11図)

DK15を中心に検出した。SB330を切る。北側が水路により削平されている。確認した長さは1.64m、長軸方向N20° E、幅0.4～0.2m、検出面からの深さは0.9m、断面逆台形の溝である。覆土からは土師器破片が出土しているのみであり、時期を特定できない。

(5) 方形周溝墓 (SM)

①SM07 (第13・18・20図 図版14・17)

DK12・DN15・DH17を中心に検出した。南側隅については部分的な確認であるが、ほぼ全体の規模は把握した。SB318・325・327・333・SK101・102に切られる。規模は北西・南東方向で約13m、北東・南西方向で約9.5mとなり、長軸方向でN56° W、長方形を呈する。周溝は幅0.65～0.95m、検出面からの深さは0.46～0.84mで、断面はV字形である。把握した範囲内では陸橋部はない。遺構の重複が多く埋葬施設は確認できなかった。周溝内より弥生土器(壺・甕)(第18図—4～7)、打製石斧(第20図—9・10)がある。壺(4)は周溝の北東側で、甕は南東側で出土しているが、いずれも溝址の覆土上層からであり、当初の埋葬に関わるものではなく、溝がある程度埋まった段階のものと考えられる。出土遺物から弥生時代後期とみられる。

第3節 遺構外出土遺物

(1) 土器 (第19図 図版18・19)

①弥生時代

1～18は中期後半の壺・甕で、櫛描文を主体とする文様が施されている。このほか、図化していないが赤彩が認められる破片も出土している。19～22は弥生時代後期前半の壺・甕である。

②古墳時代

23は前期のS字状口縁台付甕、24は中期のハケ調整を施した単純口縁の台付甕で「宇田型甕」とみられる。市内での出土例は極めて少ない。

25は、2箇所にも円形もしくは楕円形の孔が認められるもので、破片のため特定できないが多孔の甑底部とみられる。26は、須恵器(杯)で7世紀代である。

(2) 石器・石製品 (第20・21図 図版18)

第21図—1・2は黒曜石製石鏃、3～5は打製石斧、6は横刃型石器、7・8は抉入打製石庖丁、9は打製石庖丁、10は有肩扇状形石器、11は石錘、12は磨製石斧、13は磨製石斧(ノミ形)、14は砥石、第20図—6は白玉である。

第Ⅳ章 ま と め

恒川遺跡群は伊那郡衙としての位置付けがなされているが、郡衙の中心となるのは恒川遺跡群のほぼ中心にある湧水池「恒川清水」の北東側一帯（薬師垣外地籍・新屋敷地籍）であり、「恒川清水」の南西側に広がる今回の発掘調査地点（田中倉垣外地籍）一帯は集落域であると考えられる。田中倉垣外地籍における遺構は自然流路や湿地に挟まれた東西幅約150mの舌状に広がる微高地上に分布している。

今回の発掘調査で遺構として把握できたものは、弥生時代後期から平安時代までのものである。各時期の様相について以下に概観する。

〔縄文時代〕

縄文時代については、今回調査地点の西側隣接地の調査で、縄文時代中期の埋甕とみられる深鉢と黒曜石製石鏃が出土しているほか、地籍内全体では早期から晩期にかけての遺物が出土している。今回も断片的な遺物が出土したのみであり、該期の集落等については明確ではない。

〔弥生時代〕

弥生時代になると、田中倉垣外地籍内では中期から後期にかけての遺構数が増大する。

今回の調査では、中期の遺構は確認できず、破片資料の出土に留まる。周辺部の様相をみると、同地籍の西側に南北方向に延びる湿地帯が確認できるが、これまでに確認された中期の住居址はこの湿地帯に面した微高地に沿って南北に広がっている。今回の調査で確認された出土遺物もこれらとほぼ同時期であり、今回の調査地点も概期の集落の一面にあたることが想定される。

後期の遺構分布も基本的には中期と同様の立地を示す。今回の調査では方形周溝墓1基（SM07）を確認した。周辺部には方形周溝墓6基があるが、これらは相互に溝を共有するものではなく分散している。このうちのSM01は、SM07から約20m南西側に位置し、規模が11.3×9.3m、陸橋をもたない長方形を呈するものであり、13×9.5mの規模で長方形を呈するSM07と形態的に類似している。両者は埋葬施設が確認されていないが、長軸方向でみるとSM01がN55° W、SM07がN56° Wとなり、ほぼ軸を一とする。いずれも後期後半とみられることから関連が想定される。しかし、これ以外の方形周溝墓については時期的に若干遡るとみられるものもあり、墓域としてのまとまりは現時点では把握できない。

概期は、墓域と集落域とが近接して展開する傾向にある。今回の調査では後期の遺物は出土しているが、遺構外出土遺物には後期前半のものがあり、時期的に方形周溝墓よりは古い様相を示す。いずれにせよ、確実に住居址として把握されているものはないことから、墓域と集落域との関係を把握するには至らない。ただし、これまでに調査された後期の竪穴住居址の分布をみると、今回の調査地点を中心として方形周溝墓が確認される一面は比較的竪穴住居址が少なく、これに対しこの一面を挟んで南西側と北側にそれぞれ集落のまとまりがみられる。個々の遺構・遺物の検討が必要であるが、後期後半においては今回調査地点周辺を墓域としていた可能性が高い。

〔古墳時代〕

田中倉垣外地籍内では、古墳時代前期の遺構は確認されているが極めて少なく、恒川遺跡群全体でみ

た場合、概期の遺構が集中するのは、田中倉垣外地籍の東側にあり、恒川遺跡群のほぼ中央にあたる「恒川清水」周辺（恒川A・B地籍）である。中期以降は住居址の数が増加する。中期中葉以降の様相は本格的な古墳築造の開始ともかかわってくる。恒川遺跡群の北側の段丘上に立地する高岡・新井原古墳群は、帆立貝形古墳の新井原12号古墳を中心に円墳等で構成される古墳群であるが、馬を埋葬した土壌の存在から、中期における古墳形成が馬とのかかわりの中で展開したことを裏付けるものとなっている。恒川遺跡群全体でみると、田中倉垣外地籍以外にも集落のまとまりが確認できることから、居住域を異にする各集団が古墳形成にどうかかわったかが今後の検討課題である。後期前半には前方後円墳の高岡1号古墳が築造され、集落としても中期から継続する展開がみられる。古墳時代も終末になると集落が縮小するが、古墳後期末～飛鳥時代については、郡衙としての性格を考えると該期の集落のあり方は、次の新たな体制（律令体制）へと移行する中での新たな展開とも捉えられる。集落の大きな移動や再編成があることが想定される重要な時期といえる。

今回の調査では、前期の遺構は確認されていないが、S字状口縁台付甕の破片が出土しており、概期の遺構の存在が想定される。

今回の調査で最も多く確認されたのが、中期後半から後期前半の竪穴住居址である。これらの住居址は重複しており、集落域としての連続性がみられる。今回確認された住居址は、いずれもカマドを有するものである。しかし、調査区内全体から出土した遺物は多いものの、各住居址に伴う遺物は必ずしも多くはなく、把握したのがカマドのみというものもあるなど、検出状況は良くない。基本的には通常の集落のあり方とみることができる。

〔奈良時代〕

集落としては、恒川遺跡群内でも遺構分布が密な地域である。概期は大型の住居址を中心とし、これに掘立柱建物址群に伴う集落構成がなされていたと考えられる。大型の住居址には和同開珎銀銭が出土したSB44や一辺13mの規模を有するSB76からは銚帯金具が出土しており、建物自体の構造も含めて特殊性があるとみられ、官衙（伊那郡衙）に関わる周辺集落としての様相をもつと考えられる。

今回の調査では、概期の遺構としてはSB325とSI43があり、いずれも8世紀前半とみられる。

このうち、SB325について触れておきたい。第三章第2節で述べたように、通常の竪穴住居址とは異なる構造をもつとみられる。これと類似した遺構を周辺で探してみると、これまで囲溝址として報告してきたものに近い。田中倉垣外地籍内にある囲溝址1・2は、いずれも方形に区画する溝として認識されている。他の遺構との重複のため全体が把握されておらず、囲溝址1は弥生時代後期の可能性があるとして報告されているが、溝内からの出土遺物が少ないことから時期の特定が難しい。市内の他の遺跡で見ると、安宅遺跡の囲溝址4はほぼ全体を把握しており、全体の規模11.4×5.5m、溝の幅30～40cm、深さ20cmになり、溝内には1m程度の間隔で小ピットがある。本址に伴う遺物の出土はなく時期を特定できない。これについても方形に区画する溝として認識されている。この方形の溝址の内側には建物に関わる施設は確認されていないが、壁建ちの建物の可能性が考えられる。今回確認されたSB325は東側で一辺が5.2mとなり西方向に延びるが、調査区外となるため規模は不明である。周溝の幅25～35cm、深さ17～19cmで、溝内のピットは部分的に確認されている。溝の形態から安宅遺跡の囲溝址4との類似が想定される。SB325の場合は、方形の溝の内外に本址に伴う柱穴等は確認できないが、内側が版築状に層を

なしていることから、溝の内側が建物内部として意識されていたとみられ、壁建ちの建物である可能性が高い。こうした遺構は、これまでの調査では区画溝の一種として捉えてきており、今後柱穴の存在や溝址内側の状況などに注意し構造把握に努めたい。なお、時期については、安宅遺跡では近接して奈良・平安時代の遺構や並列する掘立柱建物址が確認されている。SB325は奈良時代の可能性があるとしたが、時期決定の要因には乏しい。今後、構造と同様、慎重な調査が必要である。

集落の特殊性とも合わせて集落の建物構成を検討する上でも注意したい。

〔平安時代〕

平安時代も奈良時代に引き続き、この一帯への集落展開が確認できる。

奈良時代から平安時代前期における集落のあり方は、郡衙自体の盛衰・変化と連動していることが考えられる。8世紀から9世紀前半まで比較的安定した集落展開をみせていたものが、9世紀後半以降には縮小し、10世紀以降には廃絶ないしは散発的なものになるという傾向は、郡衙の成立と機能の消滅、つまりは律令時代の変質・解体にかかわるといふ指摘とも符合してくる。

今回の調査では、概期の竪穴住居址は1軒（SB320）を確認したのみであるが、隣接地の調査では、9世紀代を中心として竪穴住居址が多く確認されており、前代から継続する集落展開がみられる。

SB320は、南側の半分以上が調査区外になるため遺物は少ないが、鉄製紡錘車が出土している点に注意される。田中倉垣外地籍出土の金属製品及び金属生産関連遺物は、特殊なものとしてはSB02から出土した「富寿神宝」があり、それ以外は農工具や鉄滓等の鍛冶関係遺物等がある。これらの分析ができていないが、手工業に関する金属製品は比較的少なく、今後資料の再整理と分析が必要である。

〔参考文献〕

下伊那地質誌編集委員会編 1976 『下伊那の地質解説』

飯田市教育委員会刊行報告書

『恒川遺跡群』（1986）

『恒川遺跡群(田中倉垣外・恒川A・恒川B地籍)―遺構編その2―』（2004）

『恒川遺跡群(田中倉垣外・恒川A・恒川B・阿弥陀垣外・新屋敷・薬師垣外地籍)―遺物編その1(古代・中世)―』（2005）

『恒川遺跡群(田中倉垣外・恒川B・阿弥陀垣外・新屋敷地籍)―遺物編その2(弥生・古墳時代)―』（2006）

『恒川遺跡群―官衙編―』（2007）

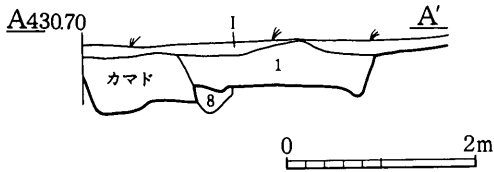
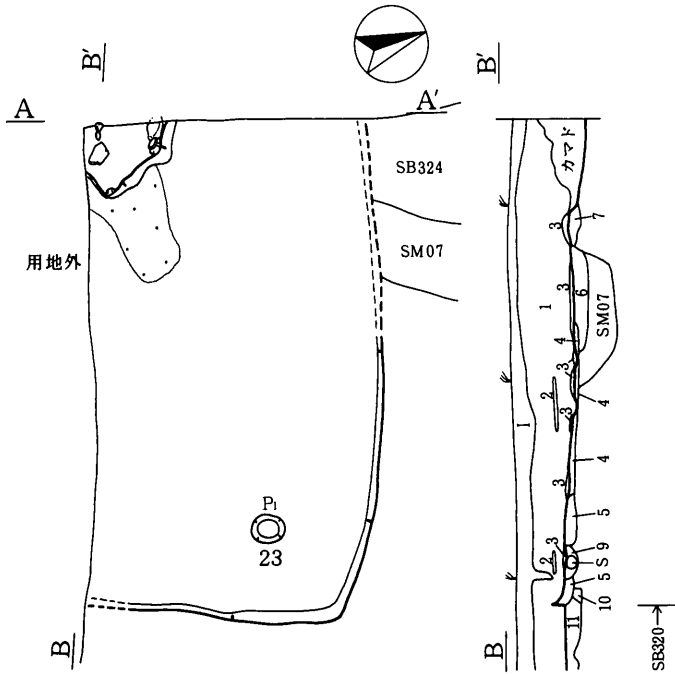
『安宅遺跡』（1995）

小平和夫 2003 「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』第55巻 第2号

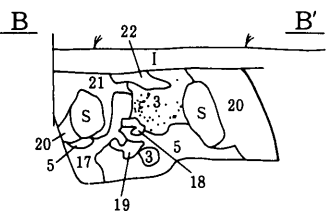
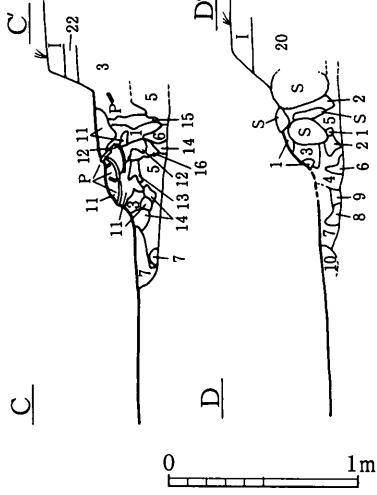
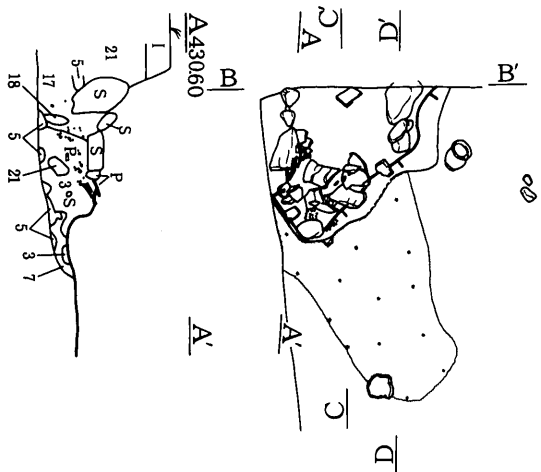
小平和夫 2008 「南信濃における古代集落の展開」『信濃の古代郡衙』長野県考古学会2007年度研究大会

山下誠一 2003 「飯田盆地における古墳時代前・中期集落の動向」『飯田市美術博物館紀要』第13集

山下誠一 2004 「飯田盆地における古墳時代後期集落の動向」『飯田市美術博物館紀要』第14集

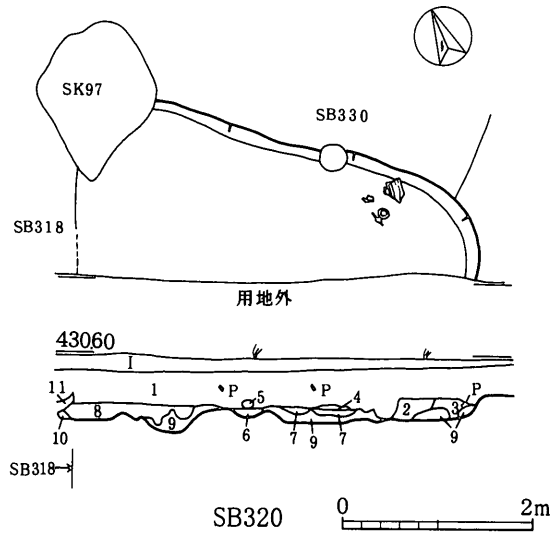
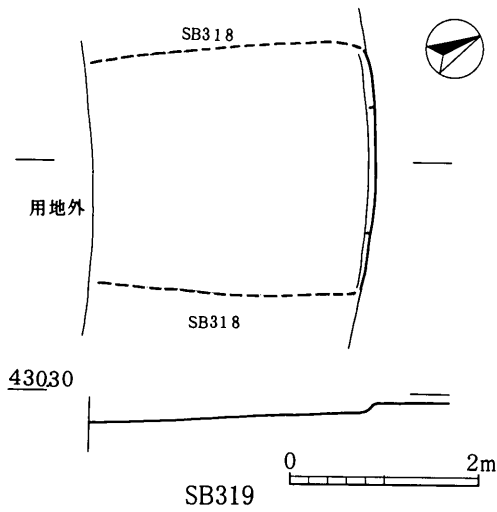


- I 基本層序
- | | | | | | |
|----|------------|------------------------------|----|--------|-----------------|
| 1 | 10YR 2/1 | 黒色土 | SC | 粘性なし | しまりなし |
| 2 | 10YR 3/2 | 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色砂30%含む | SC | 粘性ややあり | しまりあり (SB319貼床) |
| 3 | 10YR 5/6 | 黄褐色土に10YR 2/2 黒褐色土40%含む | SL | 粘性ややあり | しまりあり (SB318貼床) |
| 4 | 10YR 2/1 | 黒色土に10YR 4/2 灰黄褐色土ブロック10%含む | SC | 粘性ややあり | しまりややあり |
| 5 | 10YR 2/2 | 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土含む | SC | 粘性ややあり | しまりややあり (遺構) |
| 6 | 10YR 1.7/1 | 黒色土 | SC | 粘性なし | しまりなし (遺構) |
| 7 | 10YR 4/2 | 灰黄褐色土に2/2 黒褐色土・5/6 黄褐色土各5%含む | SC | 粘性なし | しまりなし |
| 8 | 10YR 3/2 | 黒褐色土に10YR 4/3 にぶい黄褐色砂30%含む | SL | 粘性なし | しまりなし |
| 9 | | 遺構 | | | |
| 10 | 10YR 5/6 | 黄褐色土に10YR 2/2 黒褐色土5%含む | SC | 粘性なし | しまりややあり |
| 11 | 10YR 2/1 | 黒色土に10YR 5/6 黄褐色土3%含む | SC | 粘性ややあり | しまりややあり (遺構) |



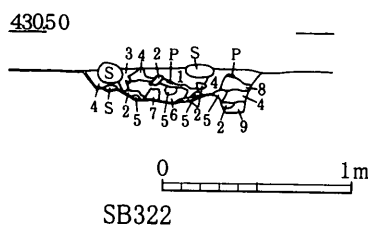
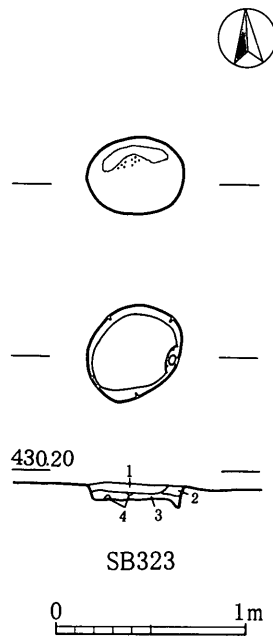
- I 基本層序
- | | | | | | | |
|----|-----------|---------------------------------|----------------|----|--------|-------|
| 1 | 10YR 3/3 | 暗褐色土 | 焼土20%含む | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 2 | 10YR 3/2 | 黒褐色土 | | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 3 | 10YR 4/4 | 褐色土 | 焼土粒2%含む | CL | 粘性あり | しまりあり |
| 4 | 10YR 4/6 | 褐色土 | | CL | 粘性あり | しまりあり |
| 5 | 10YR 3/4 | 暗褐色土に10YR 6/6 明黄褐色土粒含む | | CL | 粘性ややあり | しまりあり |
| 6 | 10YR 2/1 | 黒色土に10YR 4/6 褐色土含む | | CL | 粘性あり | しまりあり |
| 7 | 10YR 2/2 | 黒褐色土 | | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 8 | 10YR 2/2 | 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土・2/1 黒褐色土含む | | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 9 | 10YR 2/2 | 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土含む | | CL | 粘性ややあり | しまりあり |
| 10 | 10YR 3/1 | 黒褐色土 | | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 11 | 10YR 3/2 | 黒褐色土 | 焼土粒5%含む | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 12 | 10YR 2/1 | 黒色土 | 焼土粒50%含む | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 13 | 2.5YR 4/6 | 褐色土 | 焼土塊 | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 14 | 10YR 4/3 | にぶい黄褐色土 | | SL | 粘性なし | しまりあり |
| 15 | 10YR 2/1 | 黒色土 | 焼土粒・炭化物2%含む | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 16 | 10YR 3/2 | 黒褐色土 | 焼土粒10%・炭化物3%含む | CL | 粘性なし | しまりあり |
| 17 | 10YR 3/2 | 黒褐色土に10YR 6/6 明黄褐色土粒・焼土ブロック2%含む | | SL | 粘性ややあり | しまりあり |
| 18 | 10YR 5/4 | にぶい黄褐色土 | 焼土少量含む | SL | 粘性なし | しまりあり |
| 19 | 10YR 7/8 | 黄褐色土 | | SL | 粘性あり | しまりあり |
| 20 | 10YR 3/1 | 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック含む | | SL | 粘性なし | しまりあり |
| 21 | 10YR 2/1 | 黒色土 | | SL | 粘性なし | しまりあり |
| 22 | 7.5YR 3/1 | 黒褐色土 | | SC | 粘性ややあり | しまりあり |

第1図 SB318・同カマド



I 基本層序

1	10YR 2/1	黒色土	SC	粘性なし	しまりなし
2	10YR 2/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土10%含む	SC	粘性なし	しまりなし
3	10YR 3/4	暗褐色土に10YR 5/6 黄褐色土5%含む	SC	粘性なし	しまりなし
4	10YR 3/2	黒褐色土 焼土粒7%、炭化物3%含む	SC	粘性ややあり	しまりなし
5	10YR 5/6	黄褐色土 地山ブロック	SC	粘性ややあり	しまりなし
6	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土10%含む	SC	粘性ややあり	しまりなし
7	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土7%含む	SC	粘性なし	しまりなし
8	10YR 2/1	黒色土 10YR 5/6 黄褐色土3%含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり (SB320床面)
9	10YR 3/4	暗褐色土に10YR 5/6 黄褐色土40%含む	SC	粘性なし	しまりなし
10	10YR 5/6	黄褐色土に10YR 2/2 黒褐色土ブロック5%含む	SC	粘性なし	しまりややあり
11	10YR 2/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック3%含む	SL	粘性ややあり	しまりややあり



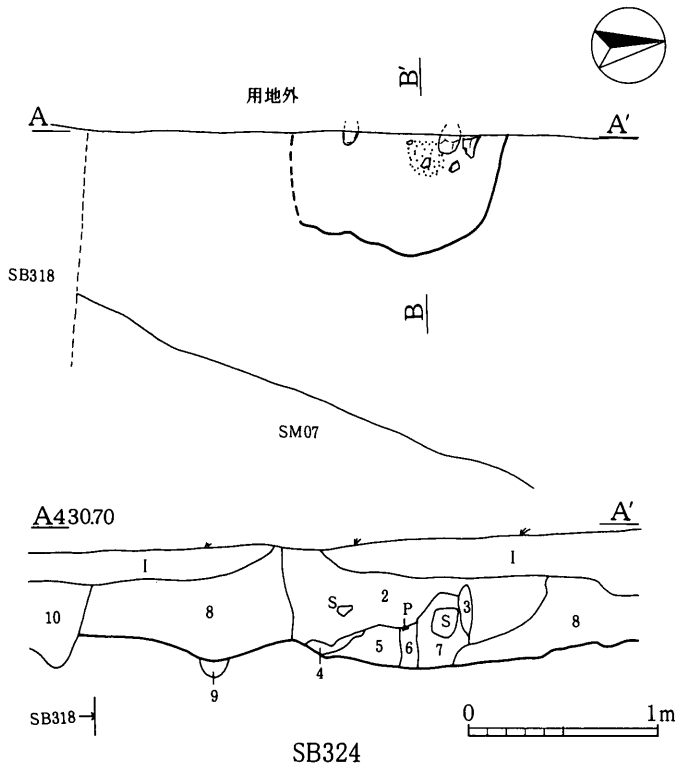
SB322

1	7.5YR 5/3	にぶい褐色土 焼土ブロック5%含む	SIC	粘性なし	しまりややあり
2	2.5YR 4/6	赤褐色土 焼土	SC	粘性なし	しまりややあり
3	10YR 4/1	褐灰色土	SC	粘性なし	しまりややあり
4	10YR 3/2	黒褐色土 焼土ブロック5%、炭化物含む	SIC	粘性ややあり	しまりややあり
5	10YR 2/2	黒褐色土 4層より炭化物多し	SC	粘性ややあり	しまりややあり
6	7.5YR 2/3	極暗褐色土 焼土ブロック1%、炭化物含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり
7	5Y 7/3	浅黄色土 地山ブロック	SIC	粘性なし	しまりややあり
8	5Y 7/3	浅黄色土 地山ブロックに10YR 3/2 黒褐色土10%含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり
9	10YR 2/1	黒色土	SIC	粘性なし	しまりややあり

SB323

1	10YR 3/4	暗褐色土に10YR 8/8 黄褐色土ブロック10%・焼土・炭化物含む	SC	粘性なし	しまりあり
2	10YR 3/3	暗褐色土 炭化物含む	SC	粘性なし	しまりあり
3	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 8/8 黄褐色土ブロック7%含む	SC	粘性なし	しまりあり
4		焼土			

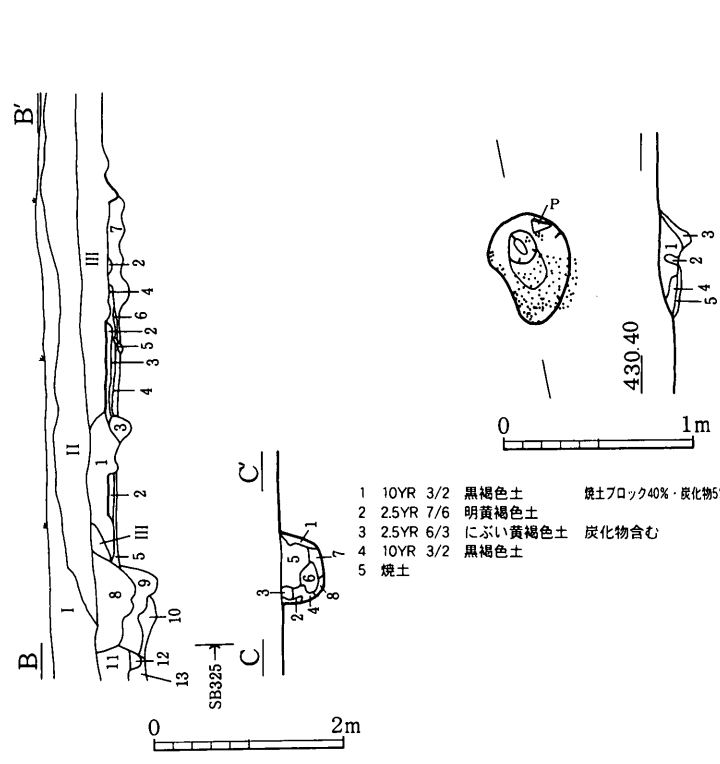
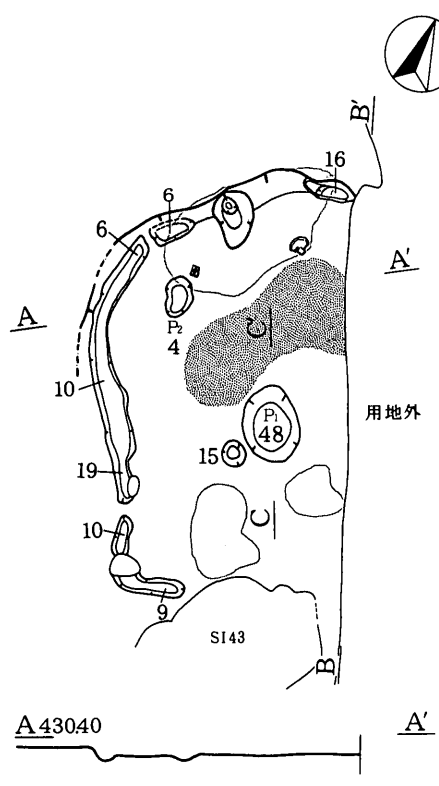
第2図 SB319・320・322カマド・323炉址



A-A'・B-B' 共通

I 基本層序

1	5YR 5/6	明赤褐色土	焼土	粘性ややあり	しまりややあり
2	10YR 3/2	黒褐色土	焼土粒3%・炭化物3%含む	SiC 粘性ややあり	しまりややあり
3	10YR 3/1	黒褐色土		SiC 粘性ややあり	しまりややあり
4	10YR 4/2	灰黄褐色土		SiC 粘性ややあり	しまりややあり
5	10YR 2/2	黒褐色土	焼土粒3%・炭化物3%含む	SiC 粘性あり	しまりややあり
6	10YR 3/3	暗褐色土	焼土粒3%・炭化物3%含む	SiC 粘性ややあり	しまりややあり
7	10YR 3/4	暗褐色土	焼土粒5%・炭化物3%含む	SiC 粘性ややあり	しまりややあり
8	10YR 3/3	暗褐色土		SiC 粘性ややあり	しまりややあり (SB324覆土)
9	10YR 3/2	黒褐色土		SiC 粘性ややあり	しまりややあり (ピット)
10	10YR 4/4	褐色土		SiC 粘性ややあり	しまりややあり (SB318)



B-B'・C-C' 共通

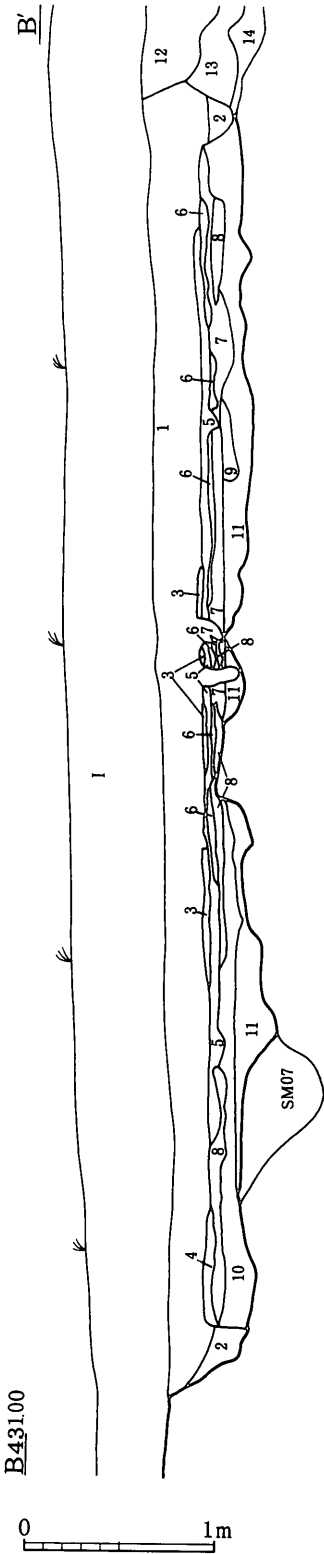
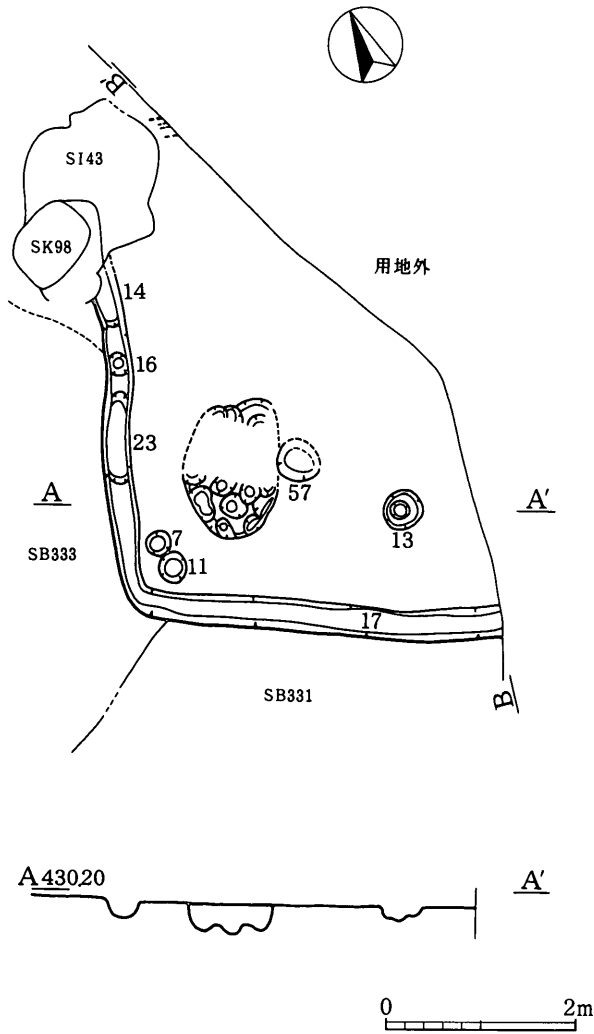
I 基本層序

II 基本層序

III 基本層序

1	10YR 2/1	黒色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック3%・炭化物2%含む	焼土ブロック40%・炭化物5%含む	SiC 粘性なし	しまりなし
2	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック10%含む		SiC 粘性ややあり	しまりあり (粘床)
3	10YR 2/1	黒色土		SiC 粘性ややあり	しまりなし
4	10YR 2/1	黒色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック20%含む		SiC 粘性ややあり	しまりなし
5	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック10%・焼土粒5%・炭化物5%含む		SiC 粘性ややあり	しまりなし
6	10YR 3/2	黒褐色土 焼土粒50%含む		SiC 粘性なし	しまりややあり
7	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック4%含む		SiC 粘性なし	しまりなし
8	10YR 3/2	黒褐色土		SiC 粘性なし	しまりなし (遺構)
9	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 4/4 褐色砂ブロック40%含む		SiC 粘性ややあり	しまりなし (遺構)
10	10YR 4/4	褐色土		S 粘性なし	しまりなし (遺構)
11	10YR 2/2	黒褐色土		SiC 粘性なし	しまりなし (SB325覆土)
12	10YR 2/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック5%含む		SiC 粘性なし	しまりなし (SB325周溝覆土)
13	10YR 4/2	灰黄褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック5%・焼土粒5%含む		SiC 粘性ややあり	しまりややあり (SB325覆土)

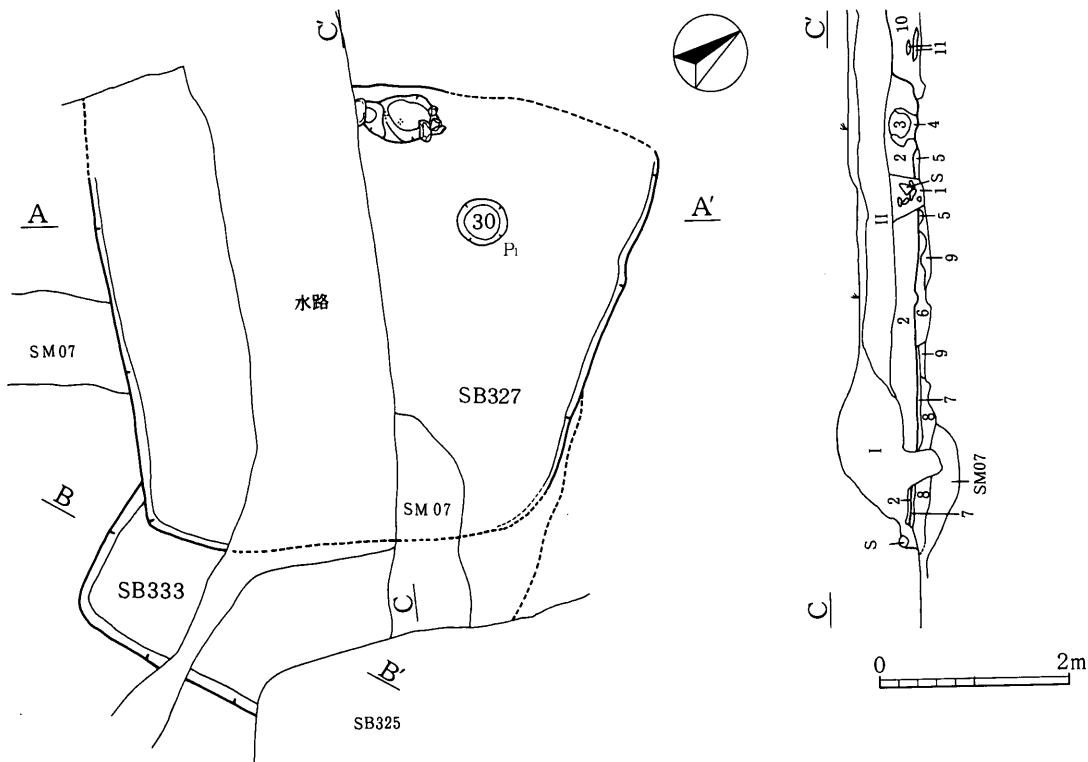
第3図 SB324カマド・326・同カマド



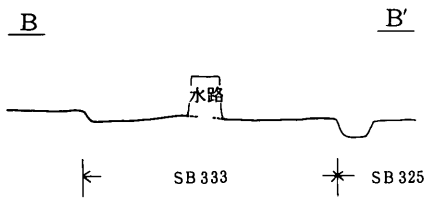
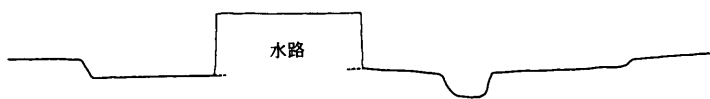
1 基本層序

1	10YR 2/2	黒褐色土	SC	粘性なし	しまりなし	
2	10YR 2/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土5%含む	SC	粘性なし	しまりなし	(SB325周溝覆土)
3	10YR 5/6	黄褐色土に10YR 2/2 黒褐色土50%含む	L	粘性ややあり	しまりあり	(貼床)
4	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土径3"を10%含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり	(貼床)
5	10YR 1.7/1	黒色土 炭化物3%含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり	(版築状)
6	10YR 5/6	黄褐色土に10YR 3/2 黒褐色土50%含む	S	粘性ややあり	しまりあり	(版築状)
7	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色砂ブロック10%含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり	(版築状)
8	10YR 5/6	黄褐色土に10YR 3/2 黒褐色土ブロック7%含む	S	粘性ややあり	しまりあり	(版築状)
9	10YR 4/2	灰黄褐色土に10YR 5/6 黄褐色砂ブロック5%・焼土粒1%含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり	(版築状)
10	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色砂ブロック10%含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり	(版築状)
11	10YR 5/6	黄褐色土に10YR 3/2 黒褐色土ブロック3%含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり	(版築状)
12	10YR 3/2	黒褐色土	SC	粘性なし	しまりなし	
13	10YR 3/2	黒褐色土に10YR 4/4 灰黄褐色砂ブロック40%含む	SC	粘性ややあり	しまりややあり	(遺構)
14	10YR 4/4	褐色土	S	粘性なし	しまりなし	(遺構)

第4図 SB325

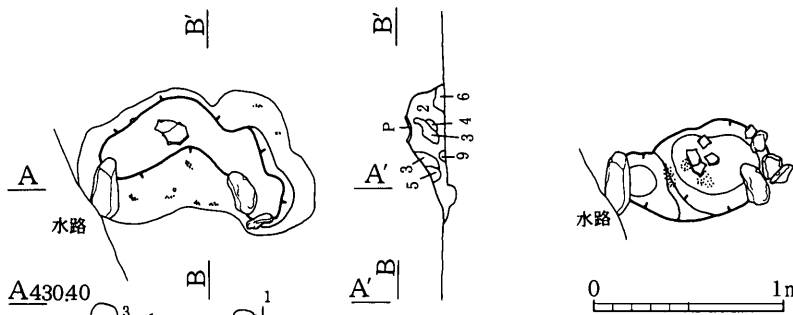


A43100



- I 基本層序
II 基本層序
- 1 10YR 2/2 黒褐色土
 - 2 10YR 2/1 黒色土
 - 3 10YR 2/2 黒褐色土 焼土粒5%含む
 - 4 10YR 5/4 にぶい黄褐色土に10YR 2/2 黒褐色土40%含む
 - 5 10YR 3/4 暗褐色土に10YR 5/6 黄褐色土40%・炭化物粒含む
 - 6 7.5YR 4/3 褐色土に10YR 5/6 黄褐色土5%・焼土粒5%含む
 - 7 10YR 2/2 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土3%・焼土粒1%含む
 - 8 10YR 3/3 暗褐色土に10YR 4/2 灰黄褐色土20%含む
 - 9 10YR 4/2 灰黄褐色土に10YR 5/6 黄褐色土20%含む
 - 10 10YR 2/3 黒褐色土
 - 11 10YR 2/1 黒色土に10YR 5/6 黄褐色土40%含む

- | | | | |
|-----|--------|---------|------------|
| SIC | 粘性なし | しまりなし | (ビット) |
| SIC | 粘性なし | しまりなし | |
| SIC | 粘性ややあり | しまりややあり | (SB327カマド) |
| SL | 粘性ややあり | しまりややあり | (SB327カマド) |
| SL | 粘性ややあり | しまりあり | (SB327貼床) |
| SL | 粘性ややあり | しまりややあり | |
| SL | 粘性ややあり | しまりややあり | (SB327貼床) |
| SIC | 粘性ややあり | しまりなし | (SB327掘り方) |
| SIC | 粘性ややあり | しまりなし | (SB327掘り方) |
| SIC | 粘性なし | しまりなし | |
| SIC | 粘性ややあり | しまりあり | |



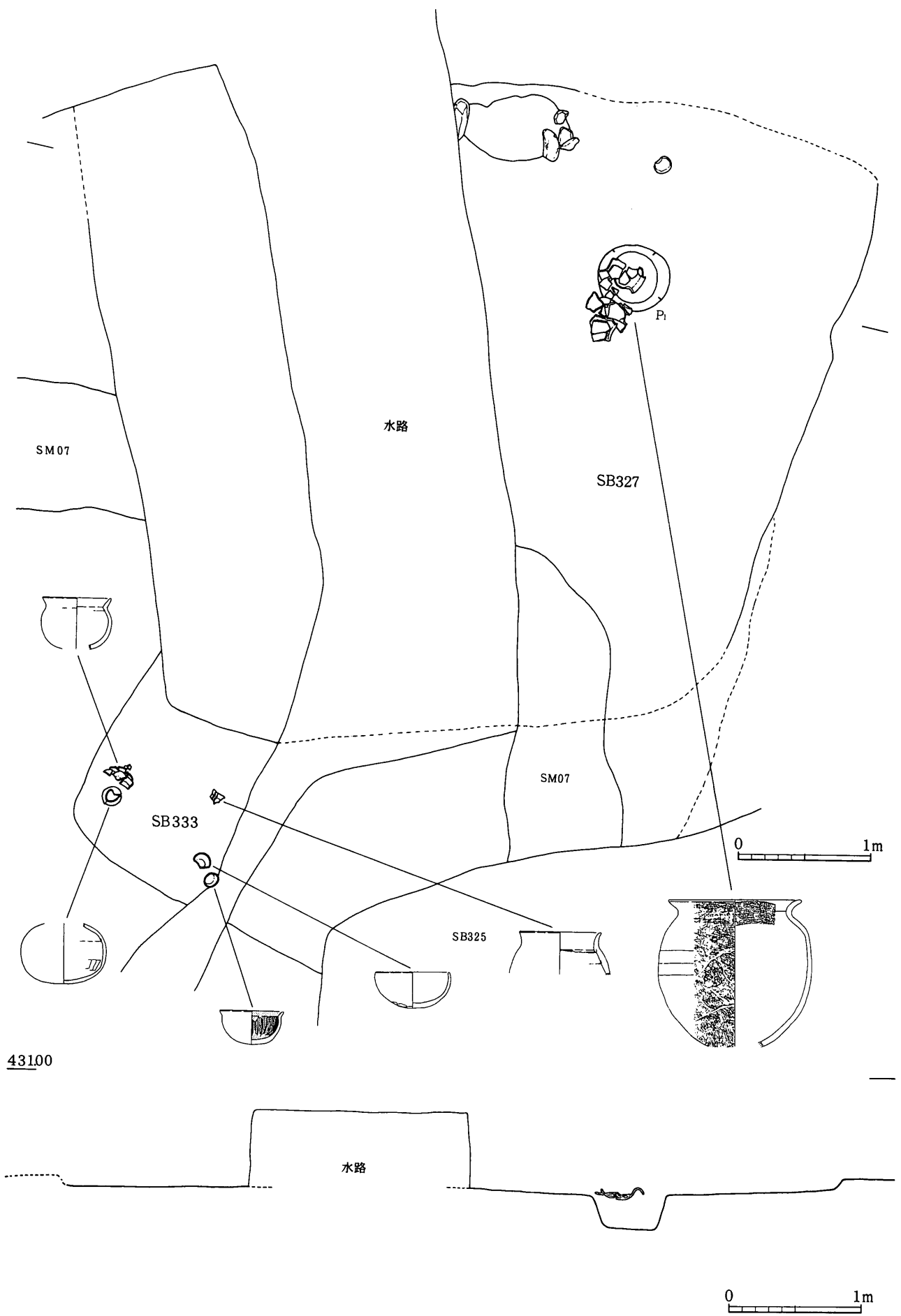
A43040

SB327カマド

- 1 10YR 3/3 暗褐色土に10YR 7/8 黄褐色土5%含む
- 2 10YR 3/3 暗褐色土 焼土・炭化物粒含む
- 3 10YR 3/4 暗褐色土に10YR 7/8 黄褐色土2%含む
- 4 10YR 2/2 黒褐色土 焼土粒5%含む
- 5 10YR 5/4 にぶい黄褐色土に10YR 2/2 黒褐色土40%・炭化物粒含む
- 6 2.5YR 2/1 黒色土
- 7 10YR 7/6 明黄褐色土に10YR 4/2 灰黄褐色土7%含む
- 8 10YR 3/2 黒褐色土に10YR 7/8 黄褐色土2%含む
- 9 焼土

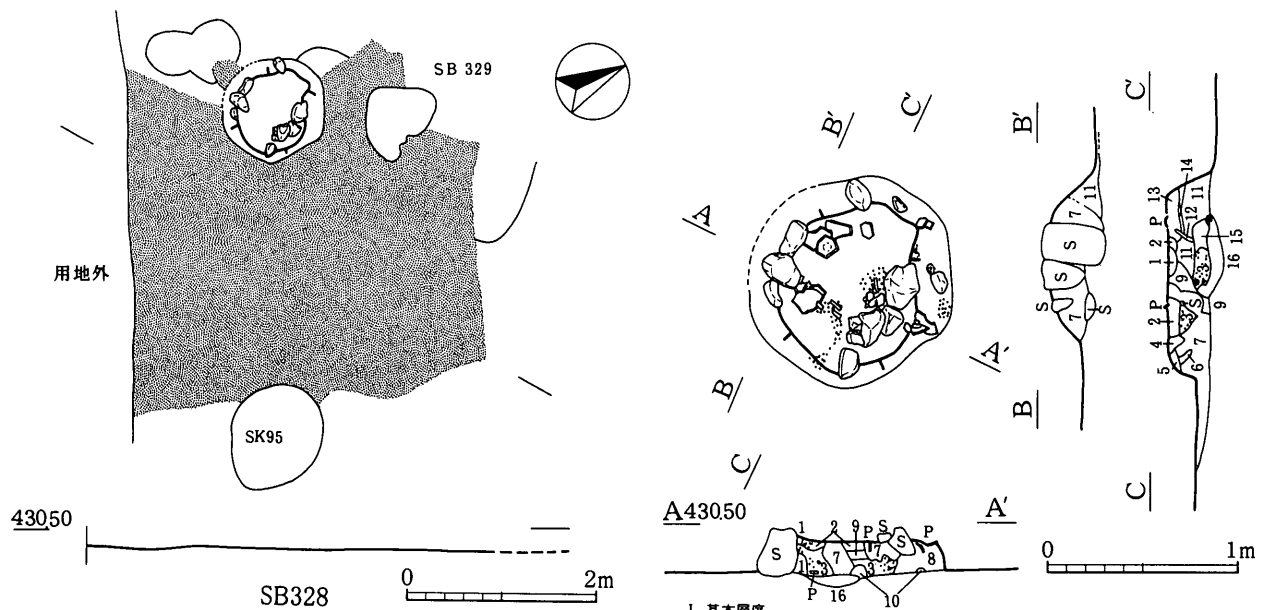
- | | | | |
|-----|--------|---------|------------|
| SIC | 粘性なし | しまりあり | |
| SIC | 粘性なし | しまりあり | |
| SIC | 粘性なし | しまりあり | |
| SIC | 粘性ややあり | しまりややあり | (SB327カマド) |
| SL | 粘性ややあり | しまりややあり | (SB327カマド) |
| SIC | 粘性なし | しまりあり | |
| SIC | 粘性なし | しまりあり | |
| SIC | 粘性なし | しまりあり | |

第5図 SB327・同カマド・333



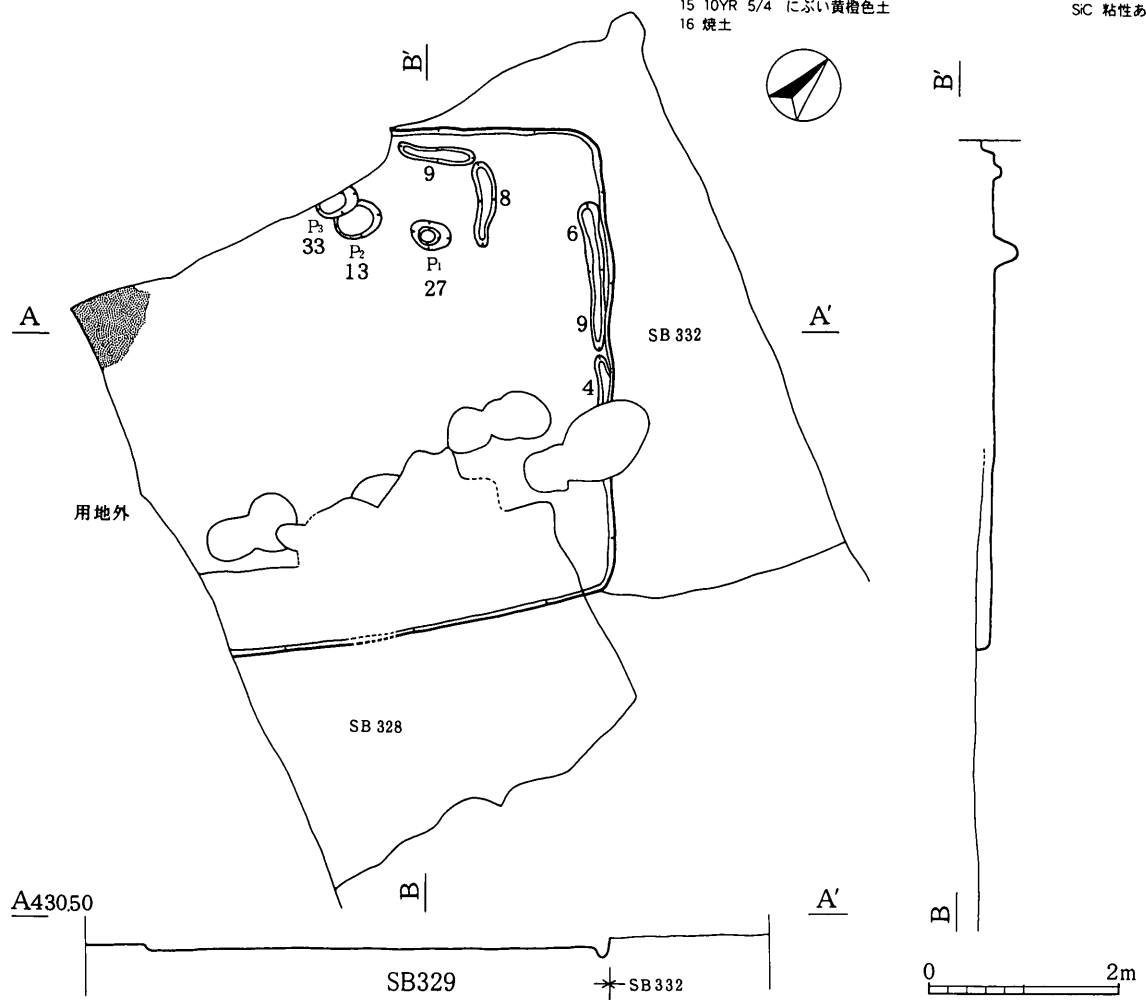
43100

第6図 SB327・333 遺物出土状況

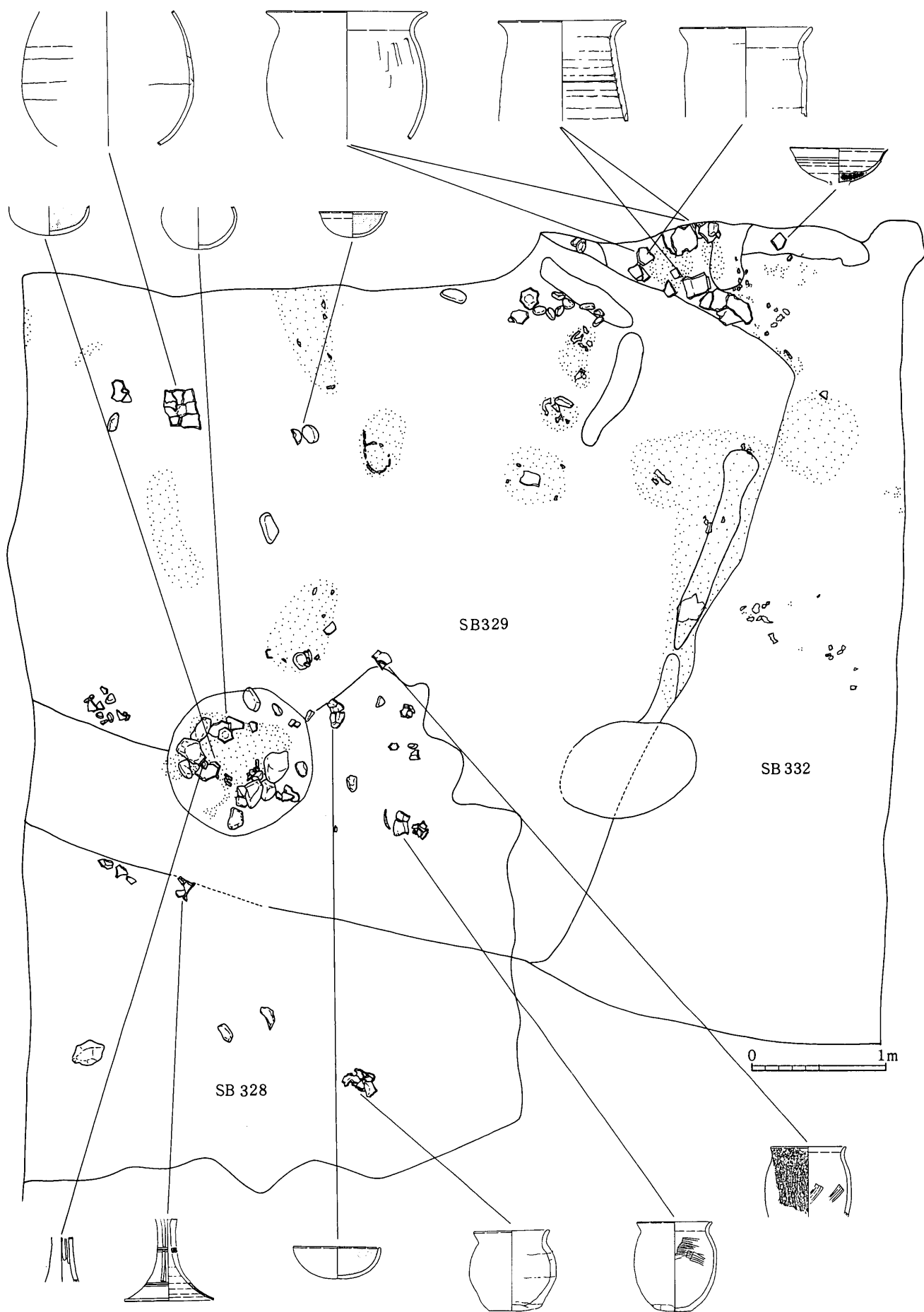


I 基本層序
II 基本層序

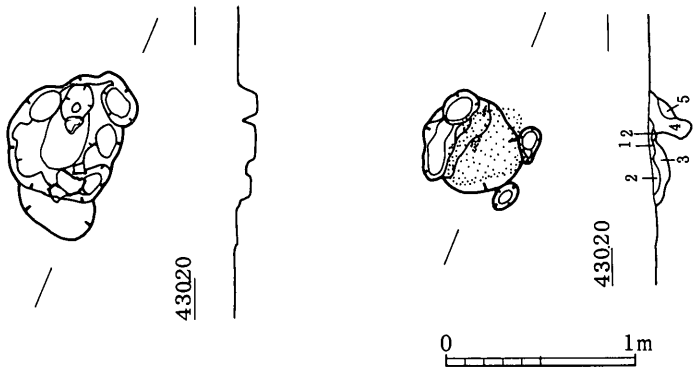
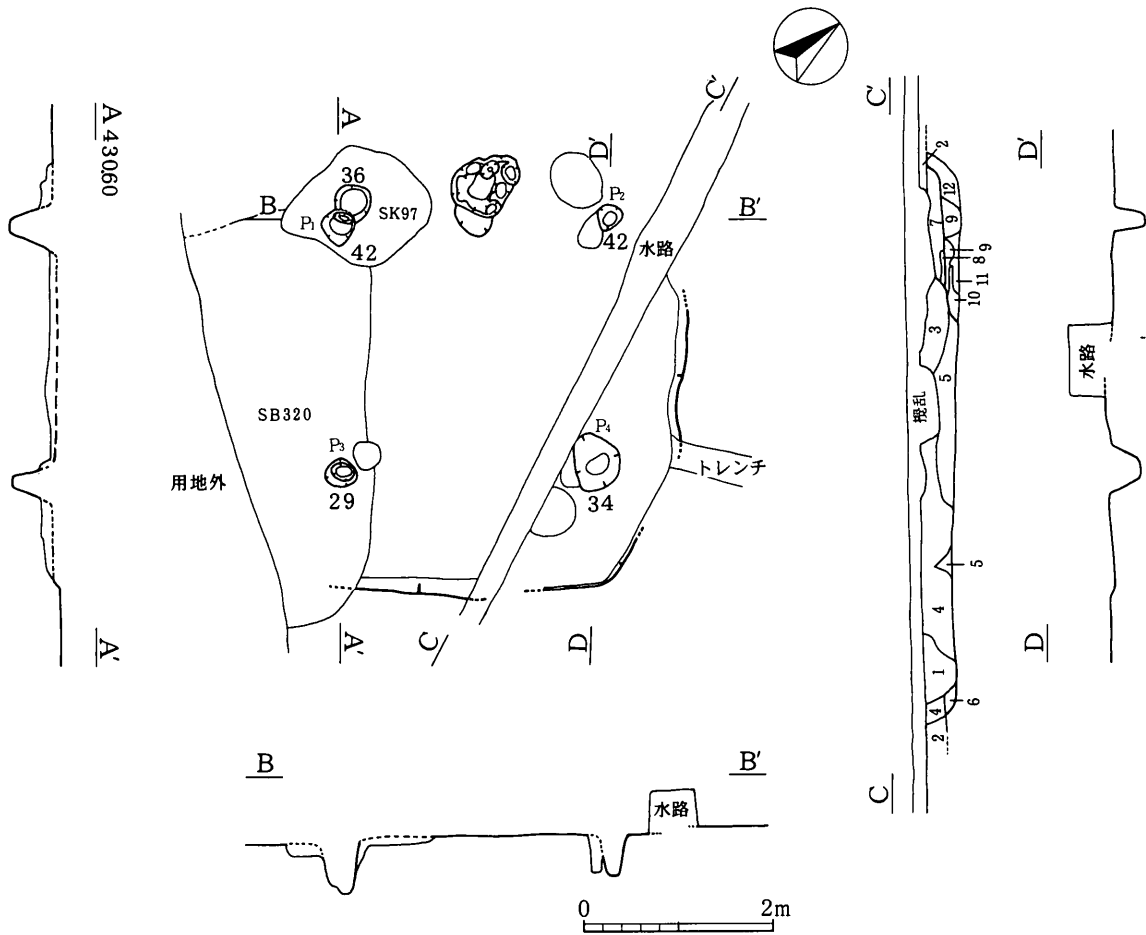
1	10YR 3/2	黒褐色土	焼土粒含む	SC 粘性あり	しまりあり
2	10YR 8/8	黄橙色土	焼土・炭化物粒含む	SC 粘性なし	しまりあり
3	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	焼土・炭化物粒含む	SC 粘性ややあり	しまりあり
4	10YR 6/6	明黄褐色土		SC 粘性ややあり	しまりあり
5	10YR 4/1	褐灰色土		SC 粘性なし	しまりあり
6	10YR 4/1	褐灰色土	焼土粒含む	SC 粘性なし	しまりあり
7	10YR 3/1	黒褐色土	焼土粒含む	SC 粘性あり	しまりあり
8	10YR 4/2	灰黄褐色土		SC 粘性なし	しまりあり
9	10YR 6/6	明黄褐色土		SC 粘性なし	しまりあり
10	10YR 7/6	明黄褐色土		SC 粘性なし	しまりあり
11	10YR 3/1	黒褐色土	焼土・炭化物少量含む	SC 粘性あり	しまりあり
12	10YR 3/3	暗褐色土		SC 粘性あり	しまりあり
13	7.5YR 3/1	黒褐色土		SC 粘性ややあり	しまりあり
14	10YR 6/4	にぶい黄橙色土		SC 粘性ややあり	しまりあり
15	10YR 5/4	にぶい黄橙色土		SC 粘性あり	しまりあり
16		焼土			



第7図 SB328・同カマド・329



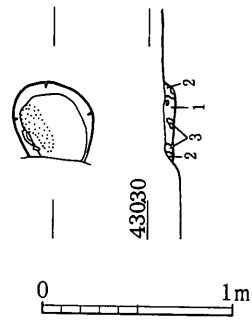
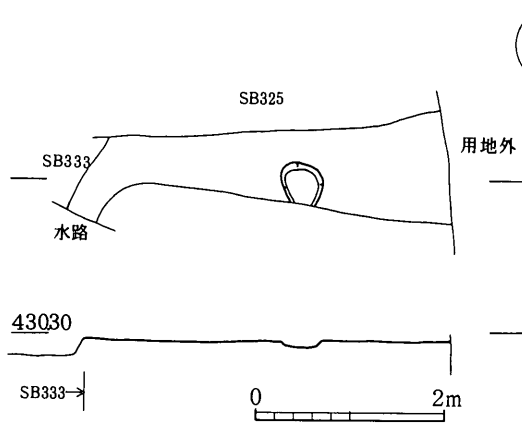
第8図 SB328・329・332 遺物出土状況



C-C'					
1	10YR 2/2 黒褐色土	SIC	粘性ややあり	しまりややあり	(ビット)
2	10YR 3/3 暗褐色土	SIC	粘性なし	しまりなし	
3	10YR 3/1 黒褐色土	SIC	粘性なし	しまりなし	(ビット)
4	10YR 3/2 黒褐色土	SIC	粘性なし	しまりなし	
5	10YR 3/2 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック5%含む	SIC	粘性なし	しまりなし	
6	10YR 4/3 にぶい黄褐色土	SC	粘性なし	しまりなし	
7	10YR 3/2 黒褐色土	SIC	粘性ややあり	しまりなし	
8	10YR 3/2 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック10%含む	SIC	粘性ややあり	しまりややあり	(粘床か)
9	10YR 2/2 黒褐色土	SIC	粘性ややあり	しまりなし	
10	10YR 3/2 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック40%含む	SIC	粘性ややあり	しまりややあり	(粘床か)
11	10YR 2/1 黒色土	SIC	粘性ややあり	しまりなし	
12	10YR 3/1 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック15%含む	SIC	粘性ややあり	しまりなし	

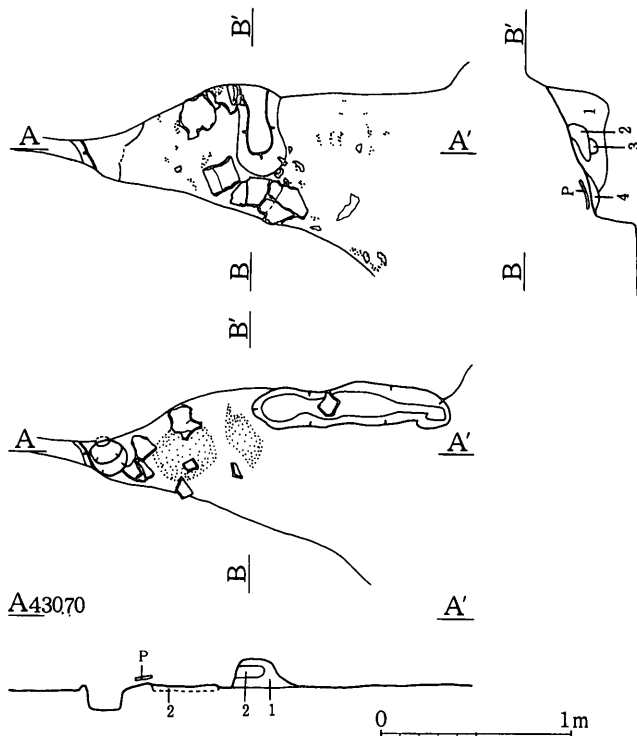
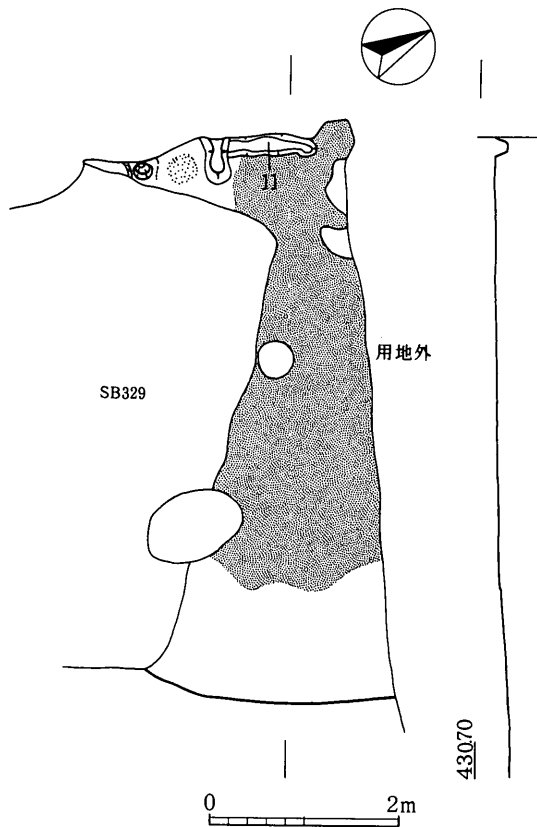
カマド					
1	7.5YR 3/2 黒褐色土	焼土・灰含む	SC	粘性なし	しまりあり
2	5YR 4/3 にぶい赤褐色土	焼土	SC	粘性なし	しまりあり
3	7.5YR 2/2 黒褐色土	焼土多く含む	SC	粘性あり	しまりあり
4	7.5YR 3/3 暗褐色土	焼土・灰・炭化物含む	SC	粘性あり	しまりあり
5	7.5YR 2/2 黒褐色土		SC	粘性あり	しまりあり

第9図 SB330・同カマド



SB331

- 1 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 SC 粘性なし しまりややあり
- 2 10YR 3/2 黒褐色土 SC 粘性ややあり しまりややあり
- 3 焼土



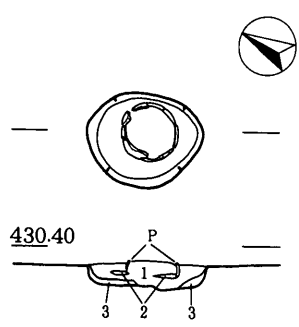
SB332

- 1 10YR 6/6 明黄褐色土 SC 粘性なし しまりあり
- 2 焼土 SC
- 3 10YR 3/2 黒褐色土 焼土・炭化物5%含む SC 粘性あり しまりあり
- 4 10YR 3/3 暗褐色土 焼土・炭化物15%含む SC 粘性ややあり しまりあり

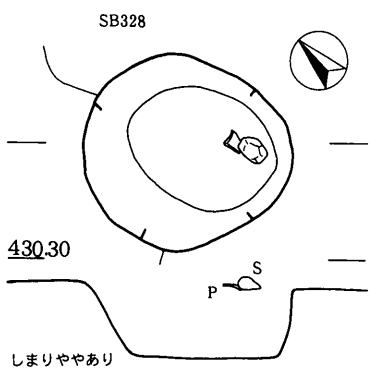
第10図 SB331・同炉址・332・同カマド

- 1 10YR 3/1 黒褐色土
- 2 10YR 3/1 黒褐色土に5Y 7/6 橙色土ブロック30%含む
- 3 10YR 2/1 黒色土に5Y 7/6 橙色土ブロック30%・炭化物含む

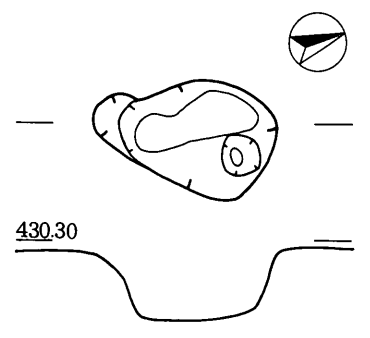
- SC 粘性ややあり しまりややあり
- SC 粘性ややあり しまりややあり
- SC 粘性ややあり しまりややあり



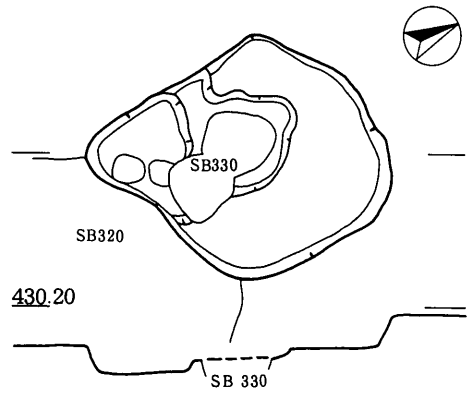
SK94



SK95



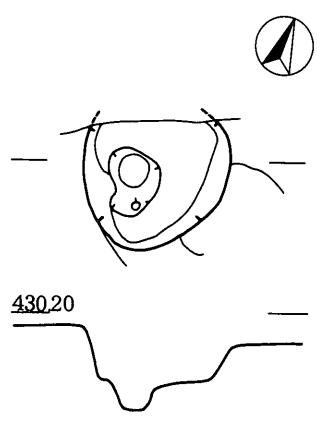
SK96



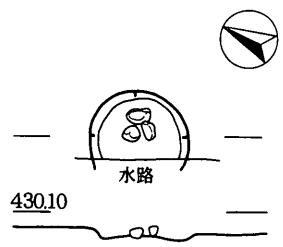
SK97



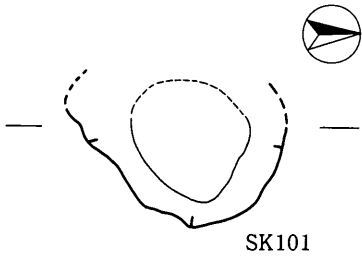
SK98



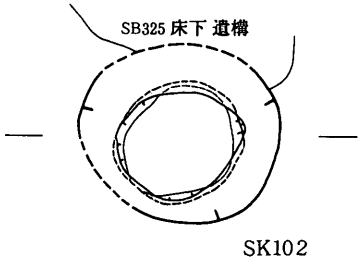
SK99



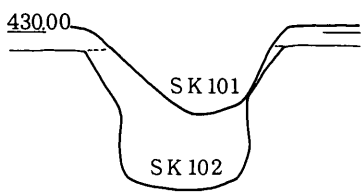
SK100



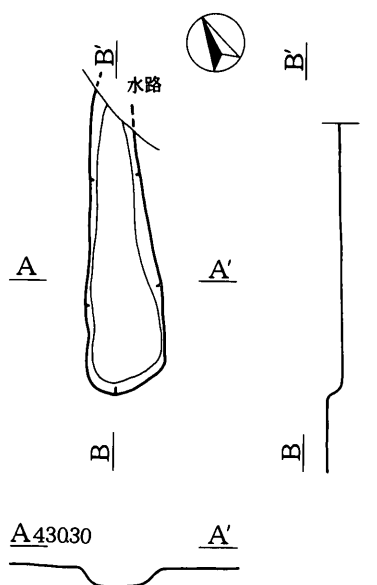
SK101



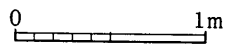
SK102



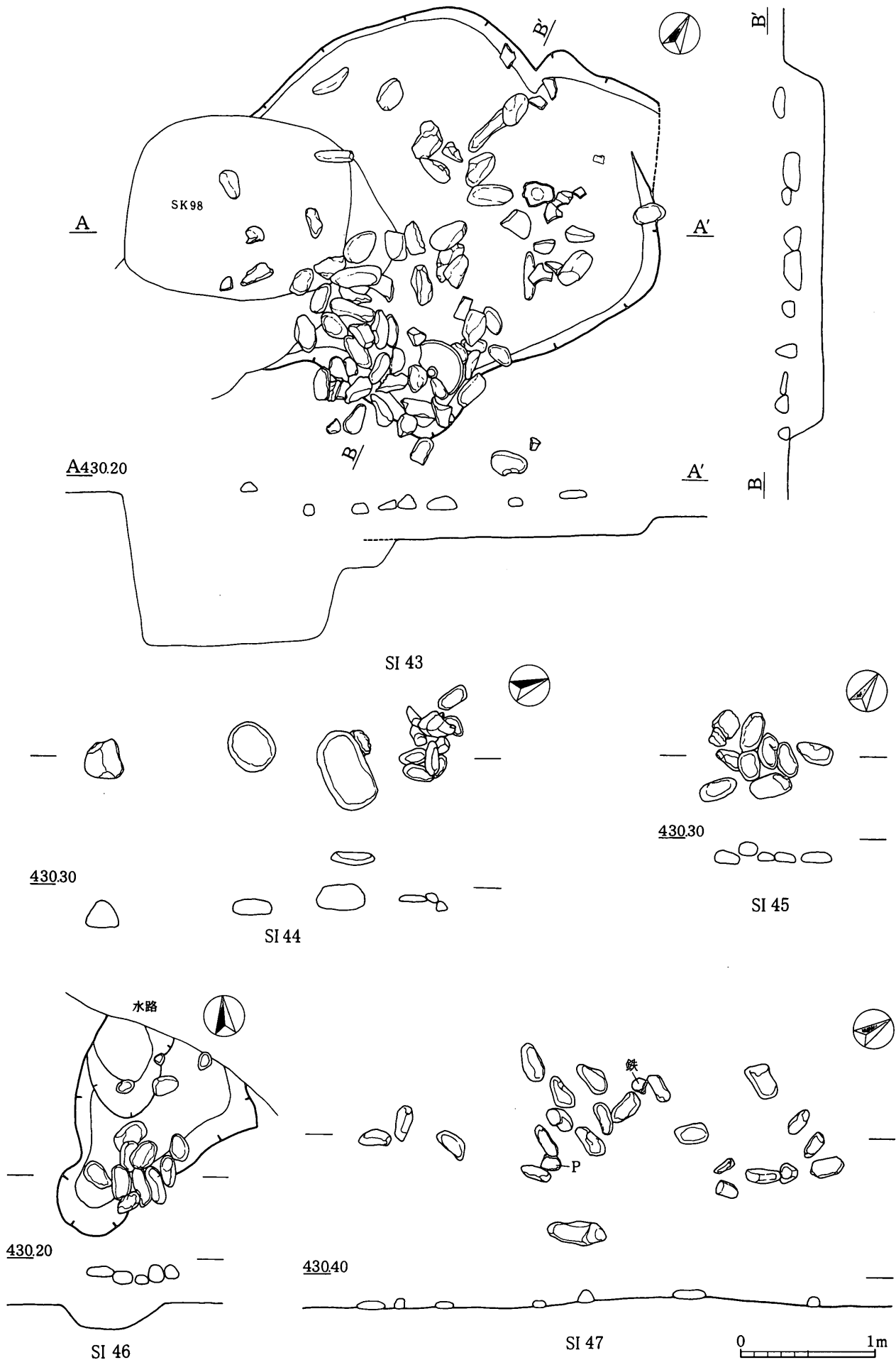
SK101・SK102



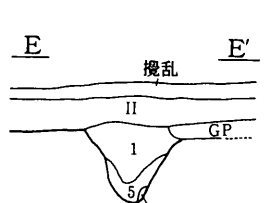
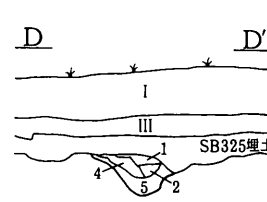
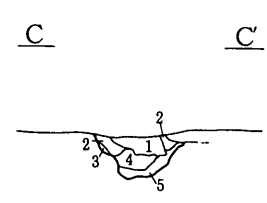
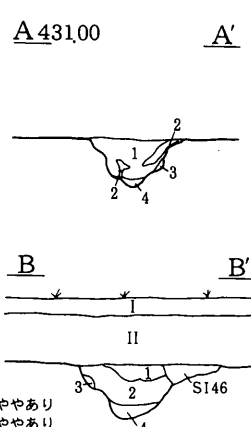
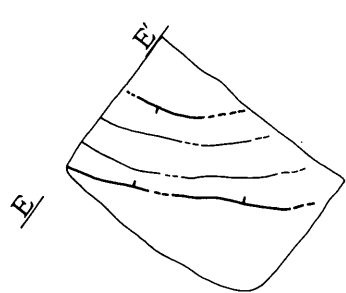
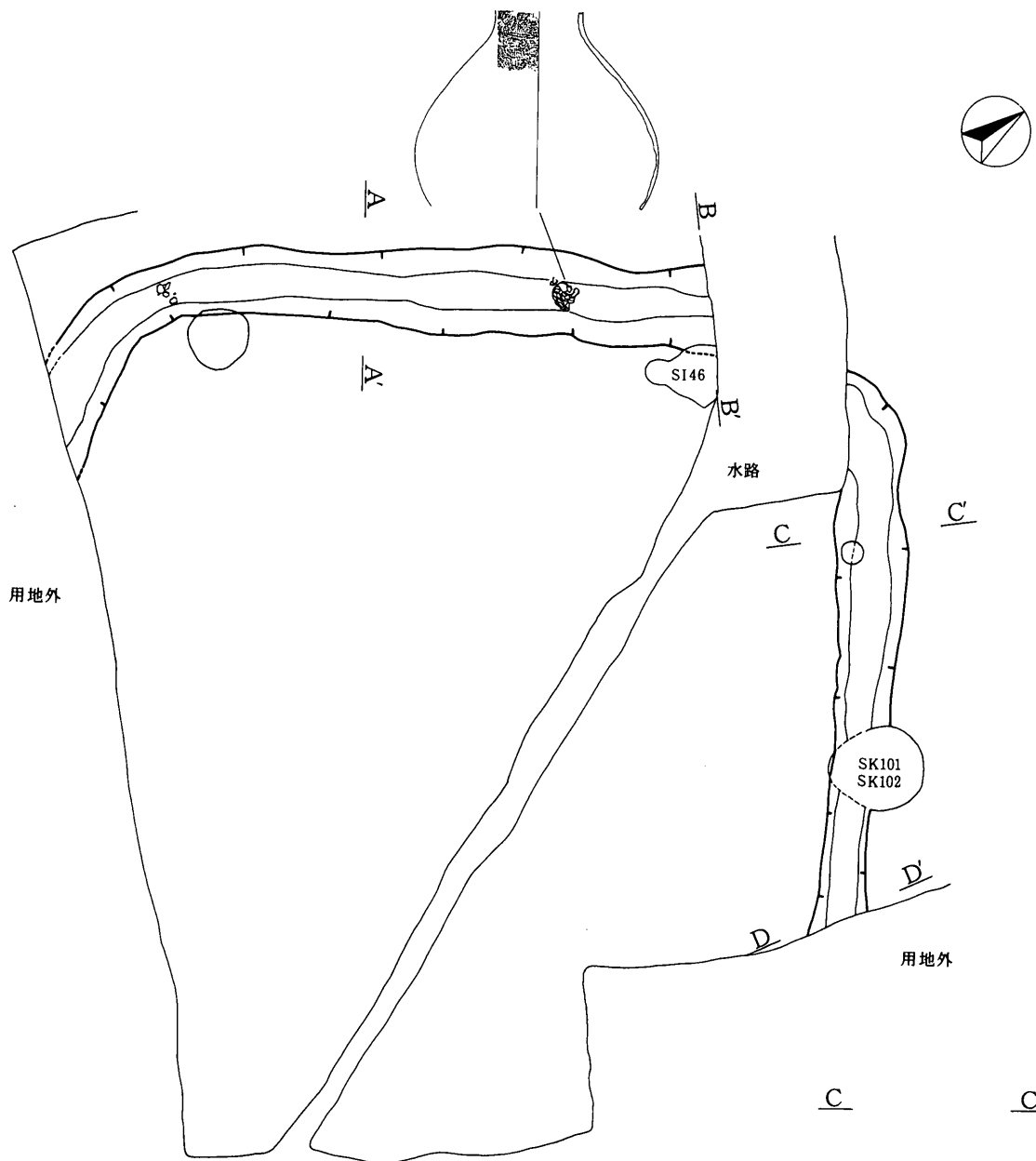
SD40



第11図 SK94~102・SD40

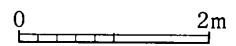


第12図 SI43~47

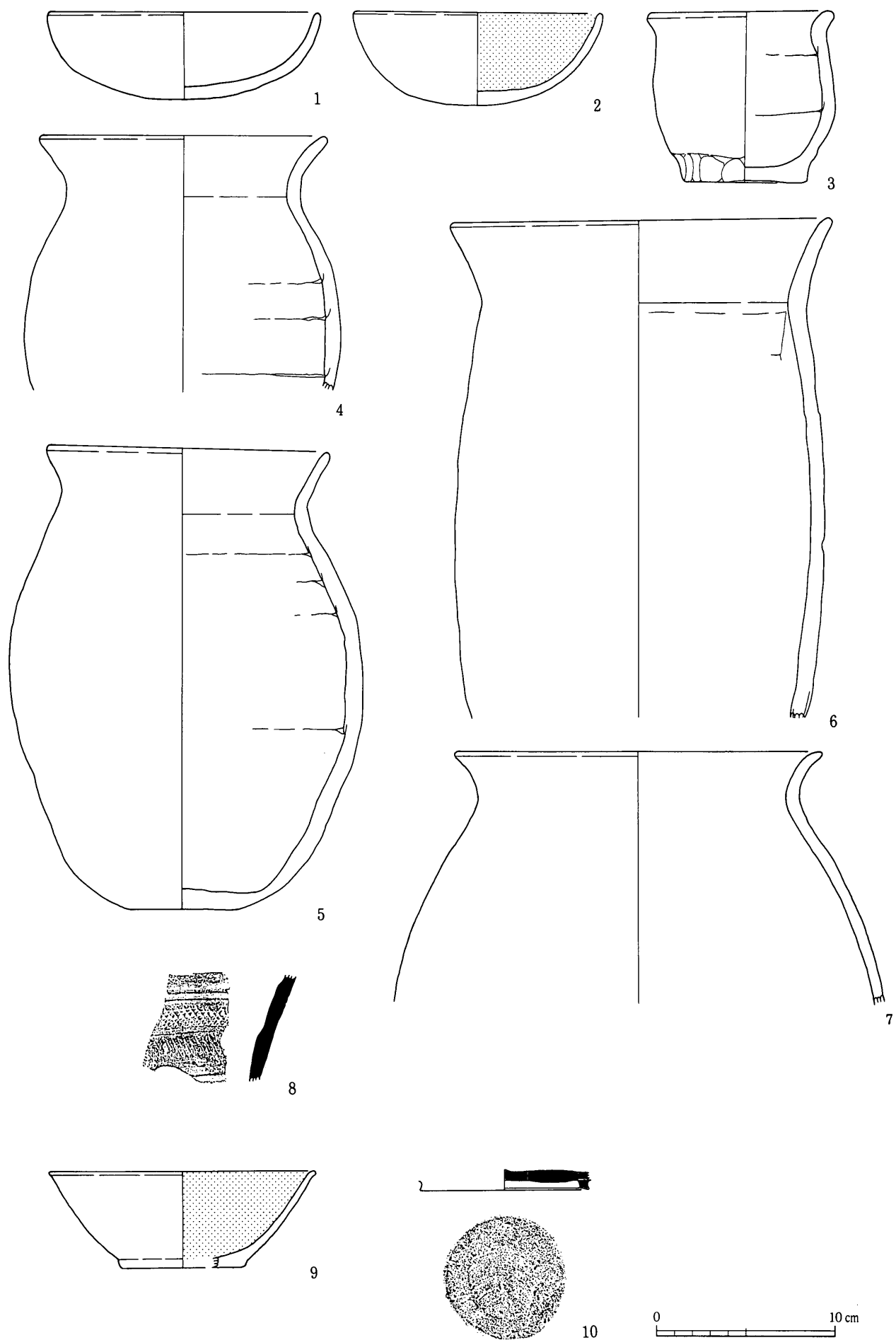


- I 基本層序
- II 基本層序
- III 基本層序
- 1 10YR 3/1 黒褐色土 遺物出土
- 2 10YR 4/3 にぶい黄褐色土に10YR 6/8 明黄褐色土含む
- 3 10YR 3/1 黒褐色土に10YR 6/8 明黄褐色土50%含む
- 4 10YR 4/2 灰黄褐色土
- 5 10YR 5/4 にぶい黄褐色土

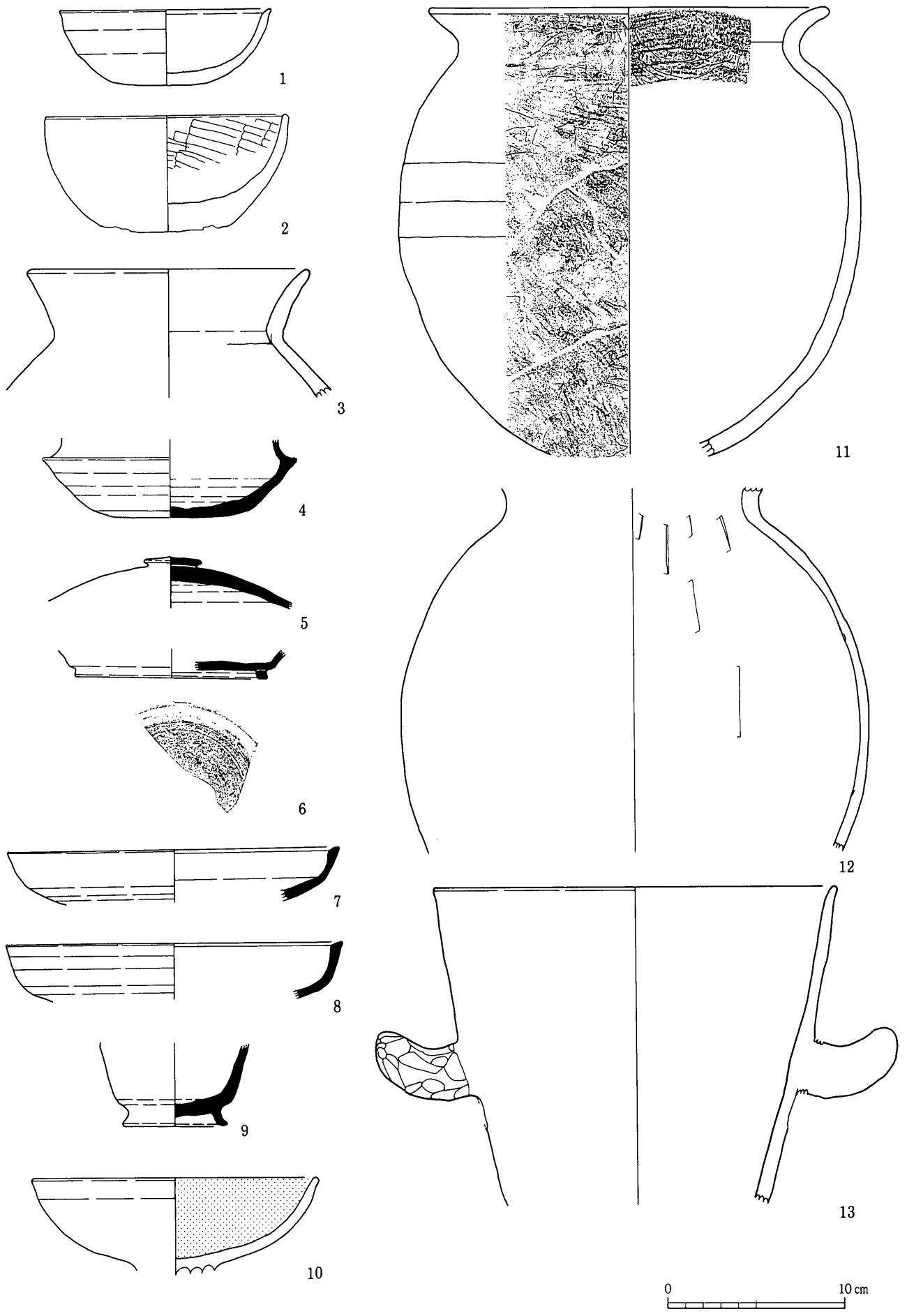
- SC 粘性ややあり しまりややあり
- SCL 粘性ややあり しまりややあり
- SC 粘性ややあり しまりややあり
- SC 粘性ややあり しまりややあり
- SC 粘性なし しまりややあり



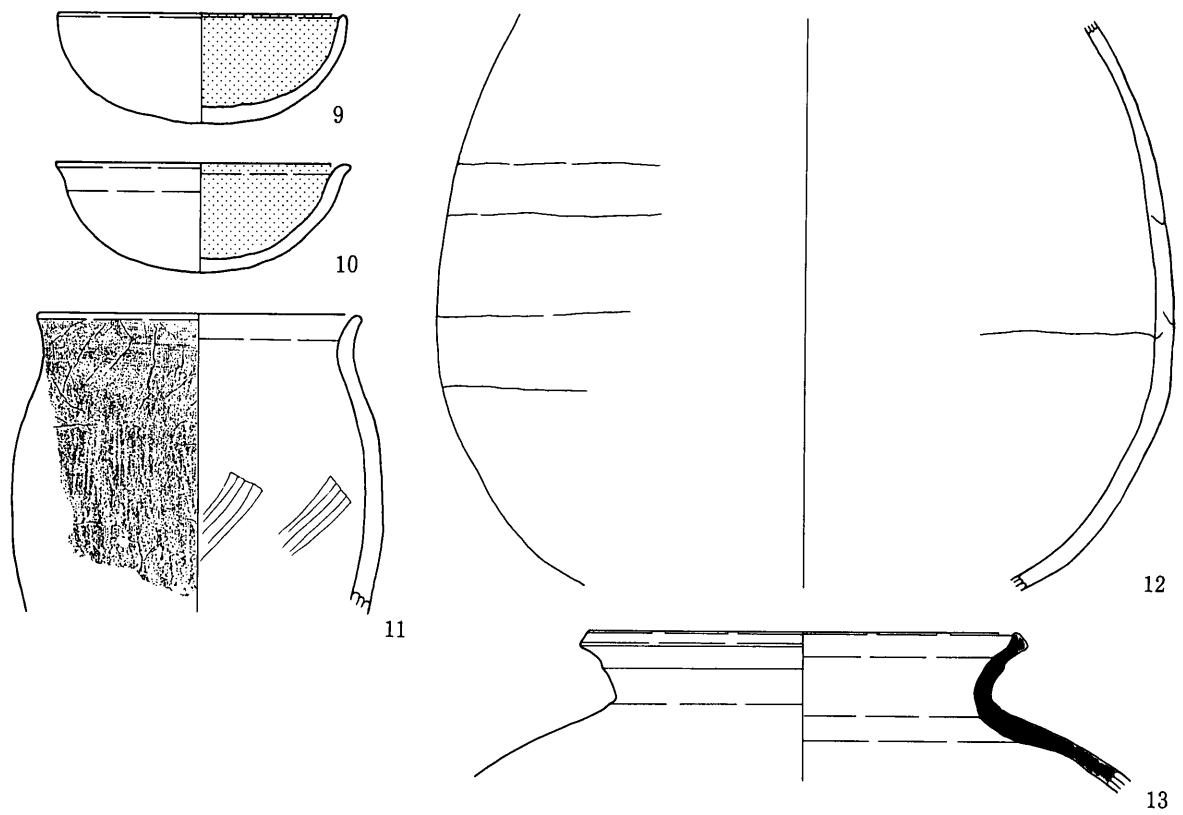
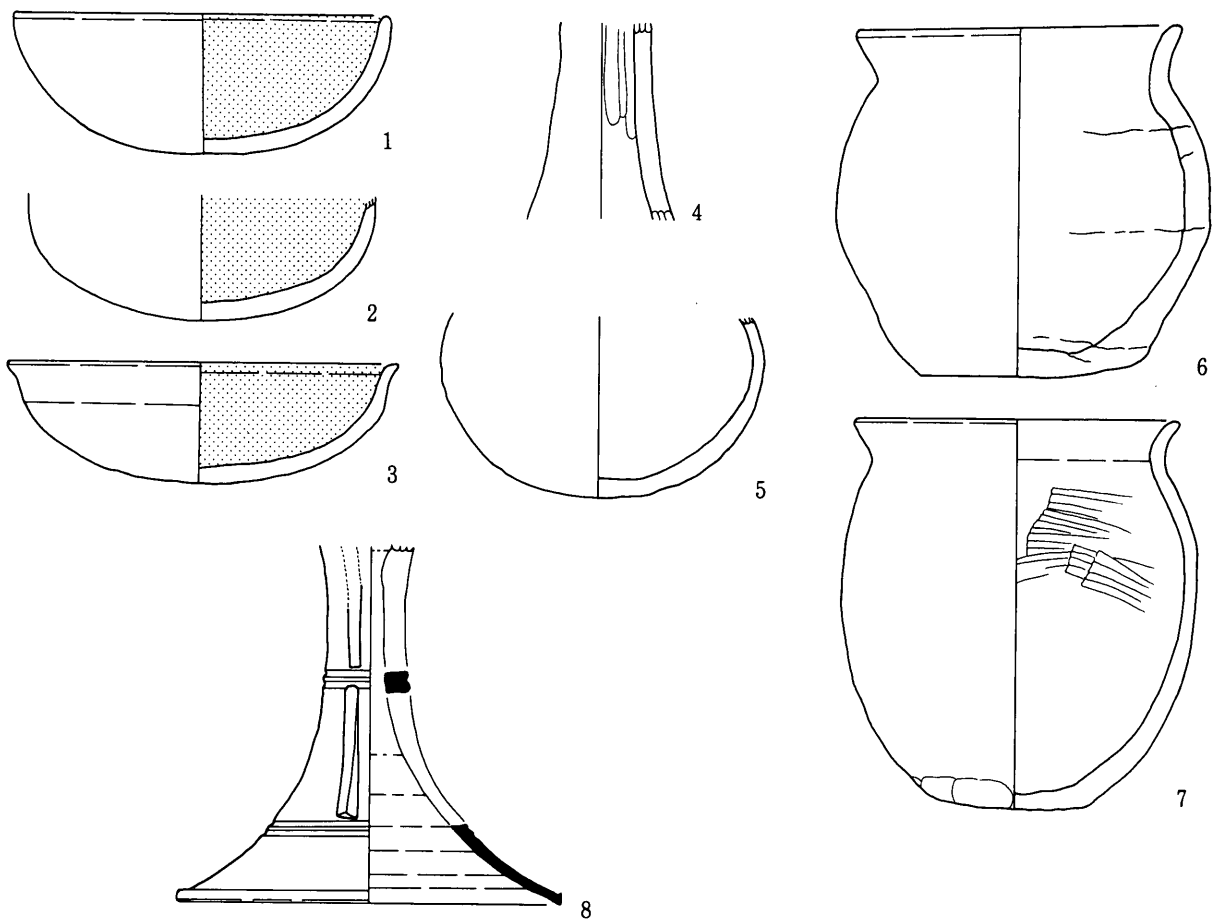
第13図 SM07



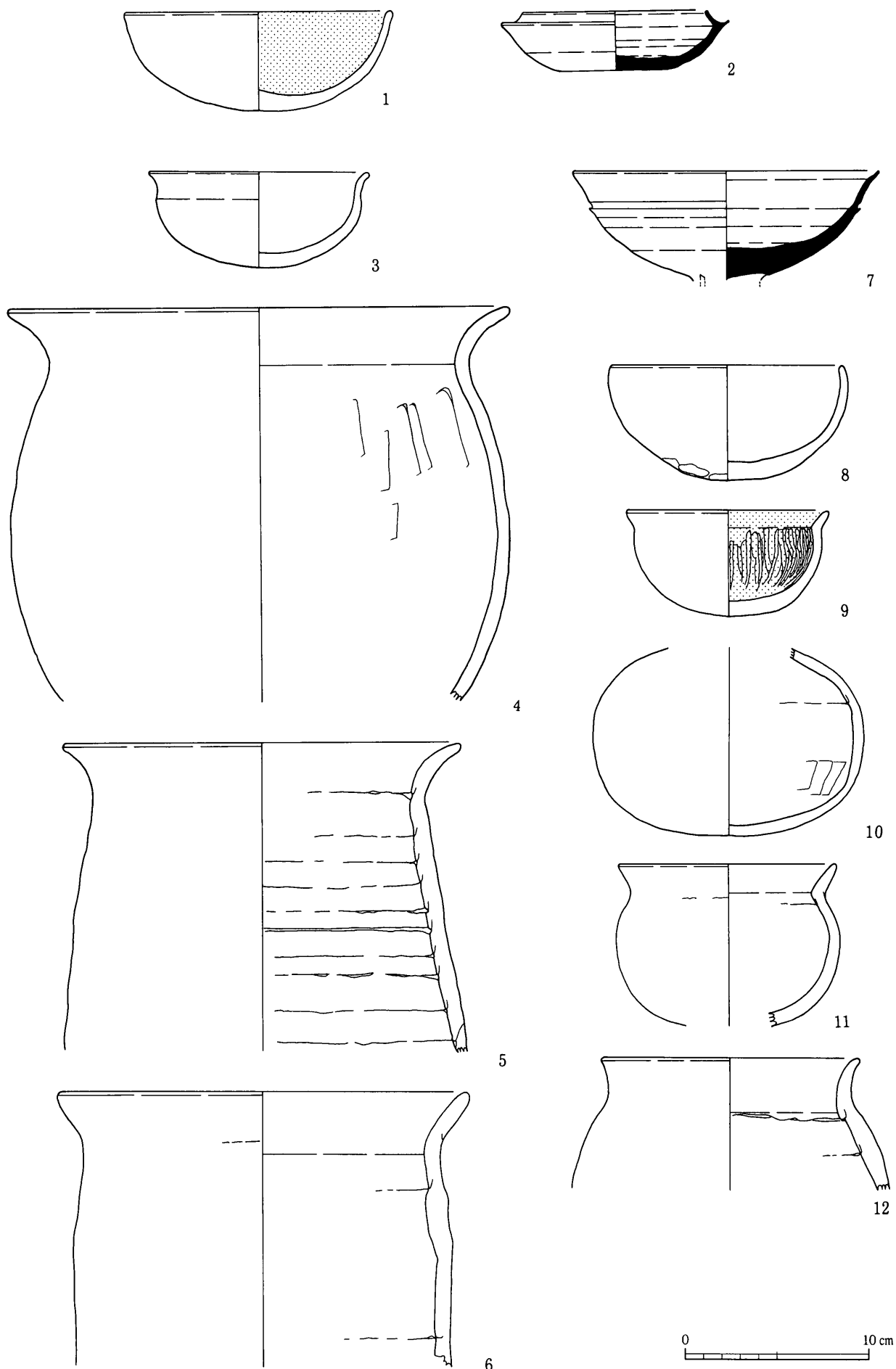
第14図 SB318 (1~8)・SB320 (9・10) 出土遺物



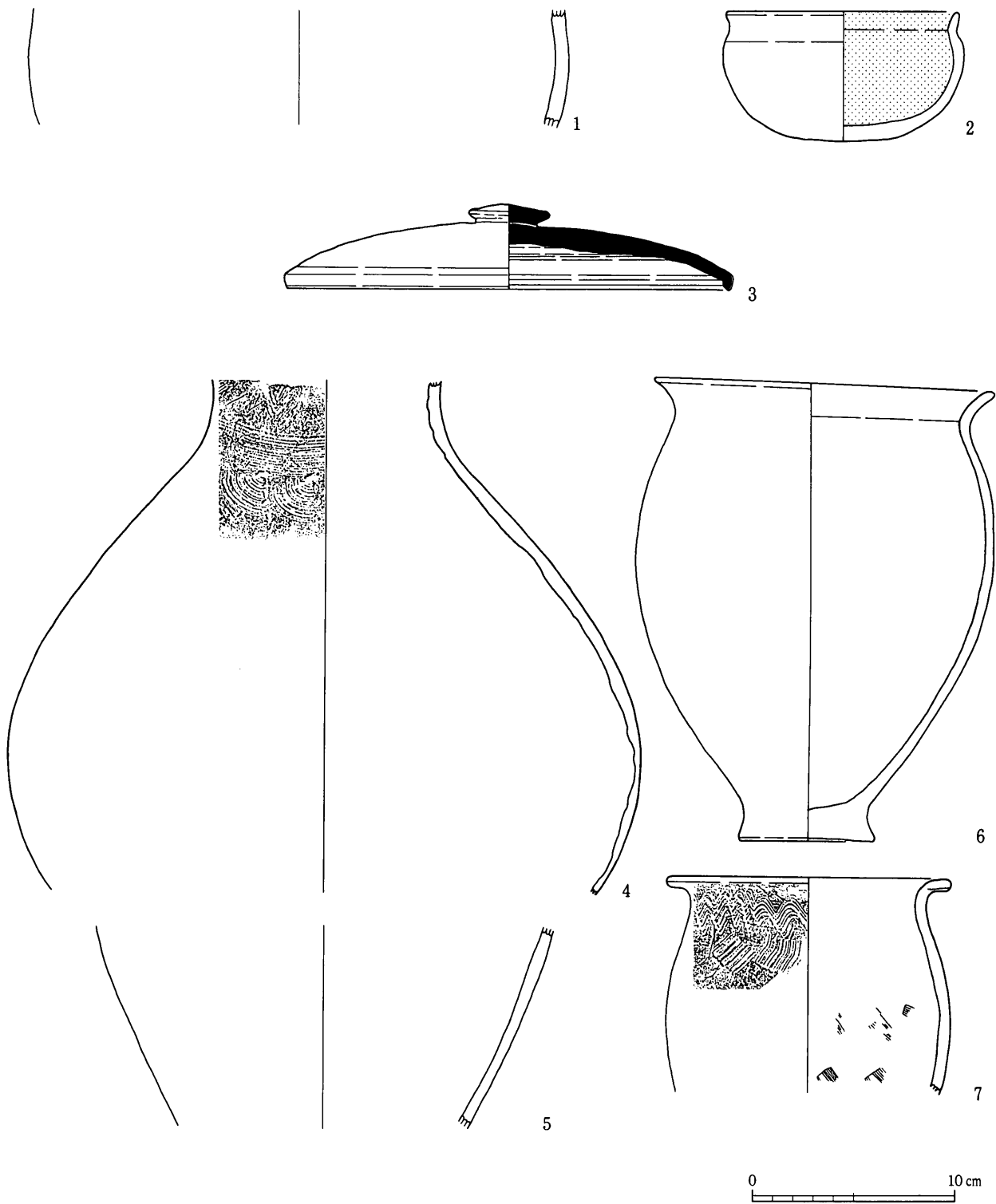
第15図 SB324 (1~4)・SB325 (5~9)・SB326 (10)・SB327 (11~13) 出土遺物



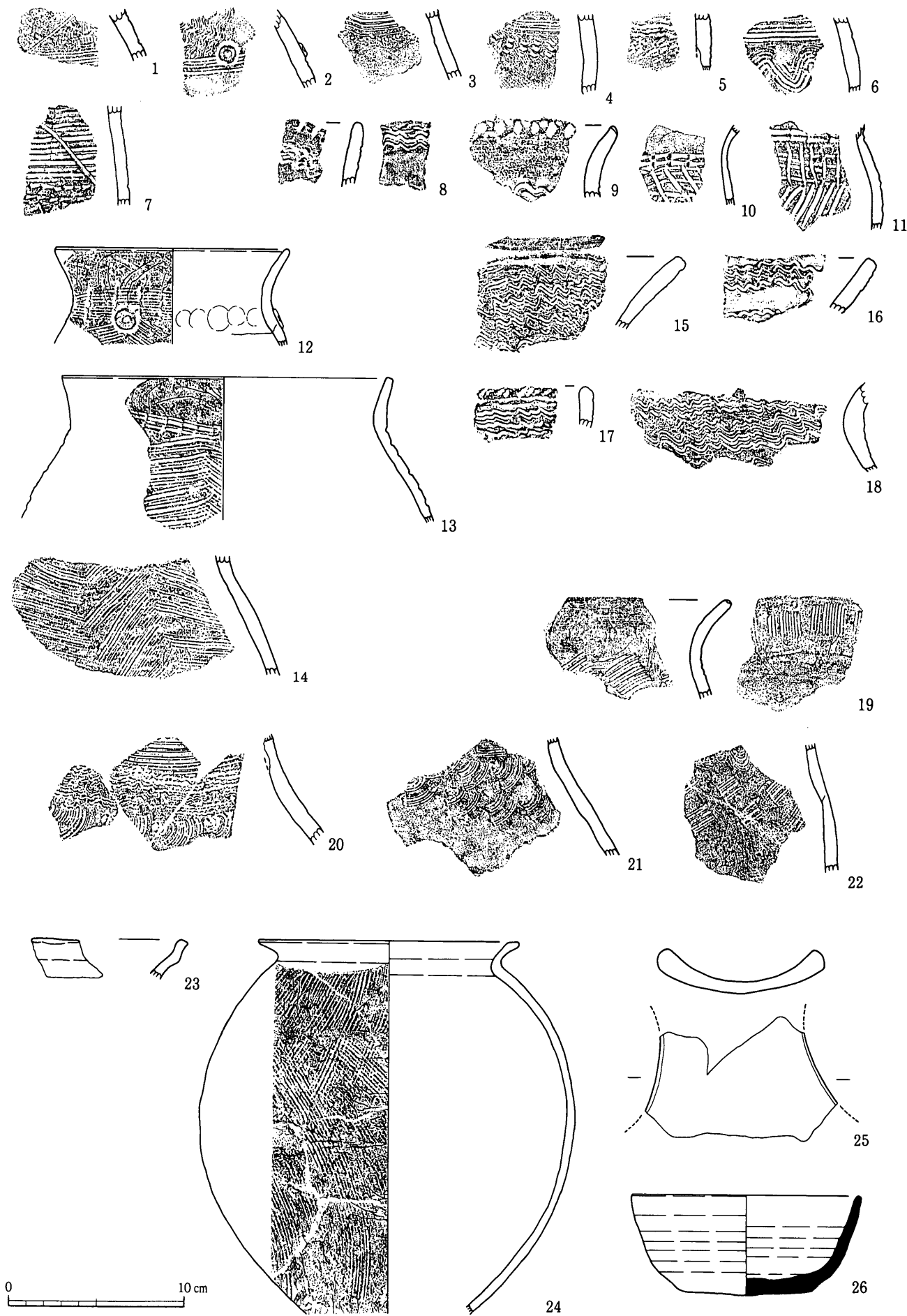
第16図 SB328 (1~8)・SB329 (9~13) 出土遺物



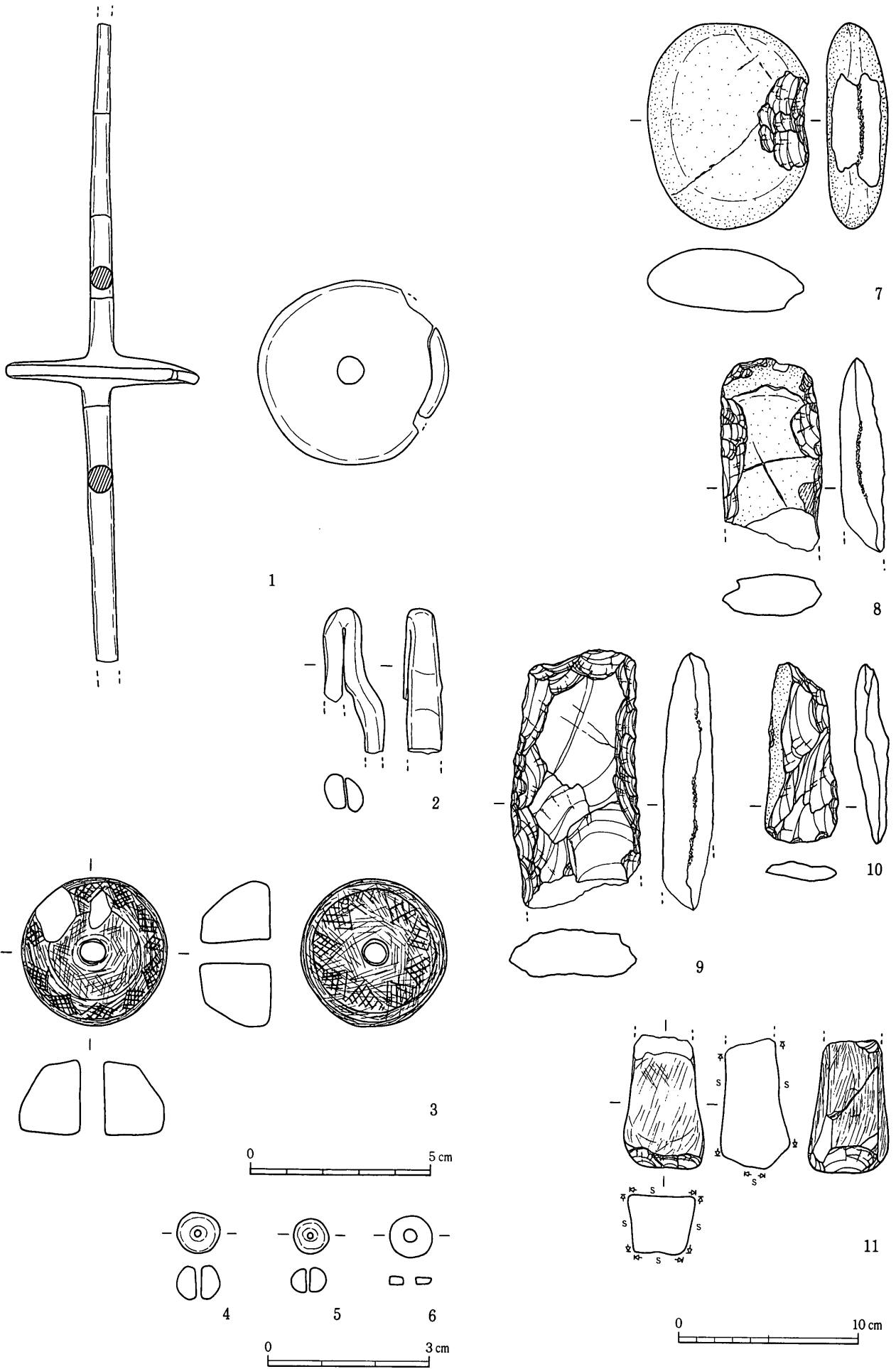
第17図 SB330 (1・2)・SB332 (3~7)・SB333 (8~12) 出土遺物



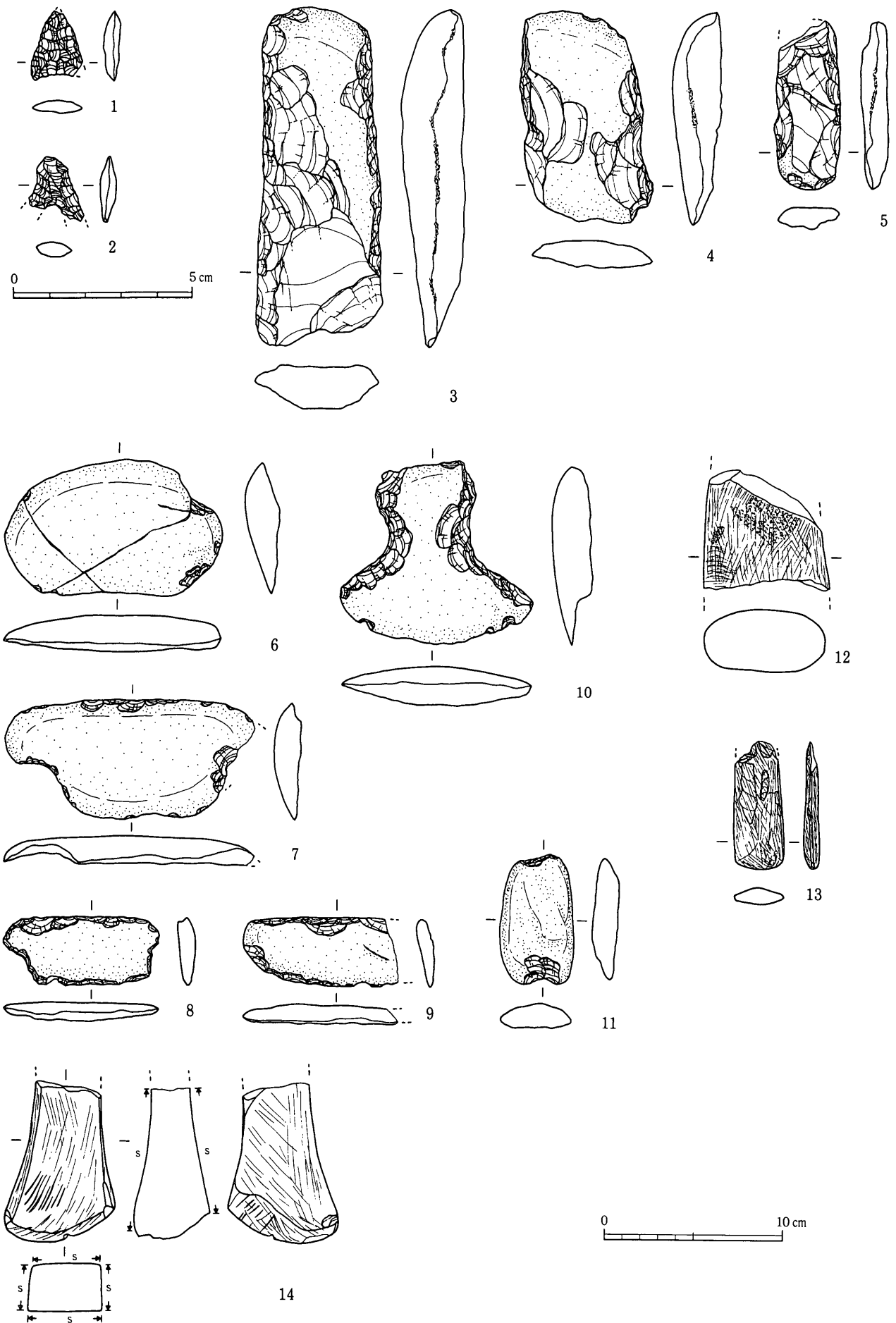
第18図 SK94 (1)・SK100 (2)・SI43 (3)・SM07 (4~7) 出土遺物



第19圖 遺構外出土遺物



第20図 SB319(3)・SB320(1・2・11)・SB326(4)・SB327(7)・SB330(5)・SK98(8)
SM07(9・10)・遺構外(6) 出土遺物



第21図 遺構外出土遺物



調査区全景（東から）



同 上（西から）



SB318



同 カマド



同 カマド断面



SB319



SB320



同 遺物出土状況



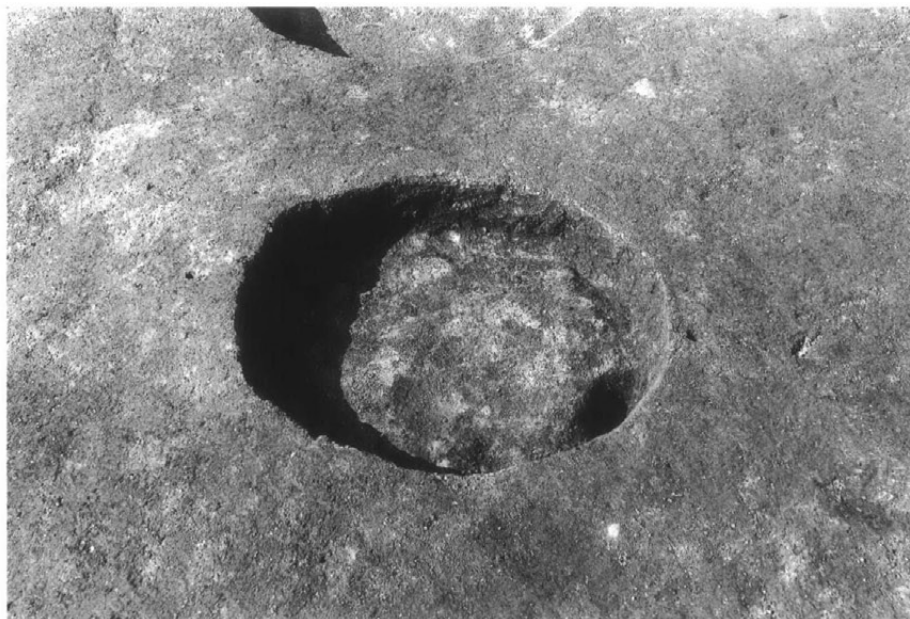
SB322 カマド



同 カマド掘り方



SB322 炉址断面



SB323 炉址



SB324 カマド



SB324 カマド断面



SB325



同 覆土断面



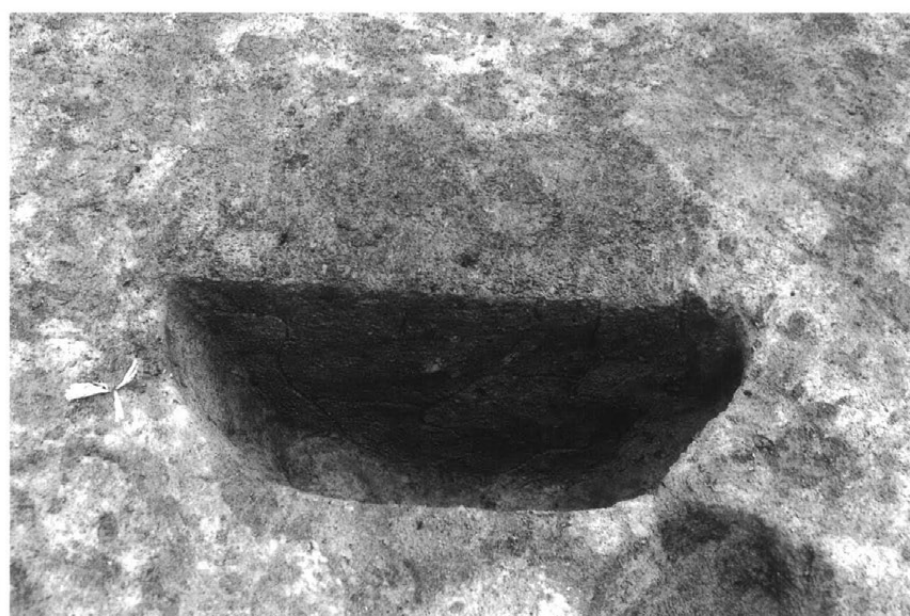
同 床面の土層断面



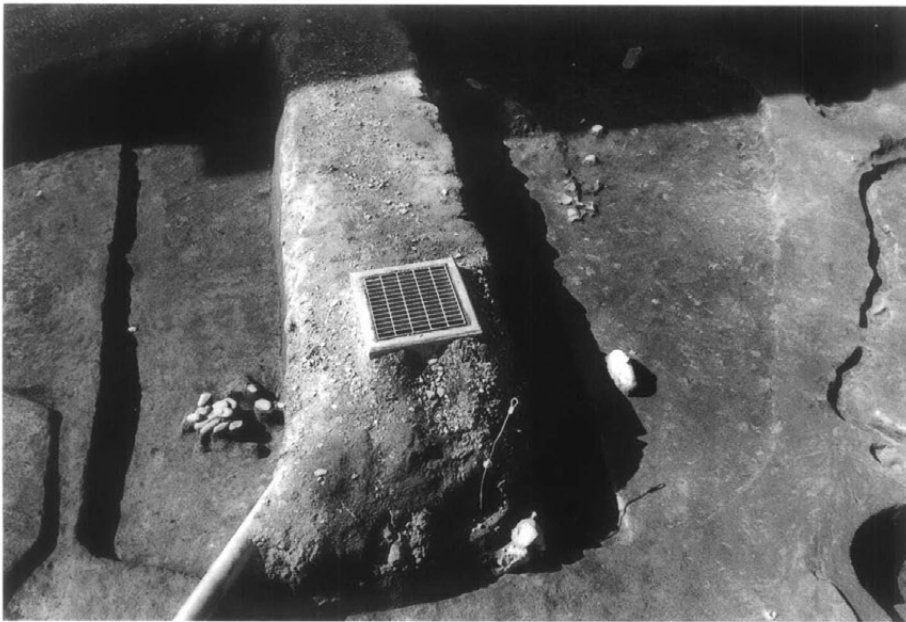
SB326



同 カマド



同 中央ピット断面



SB327



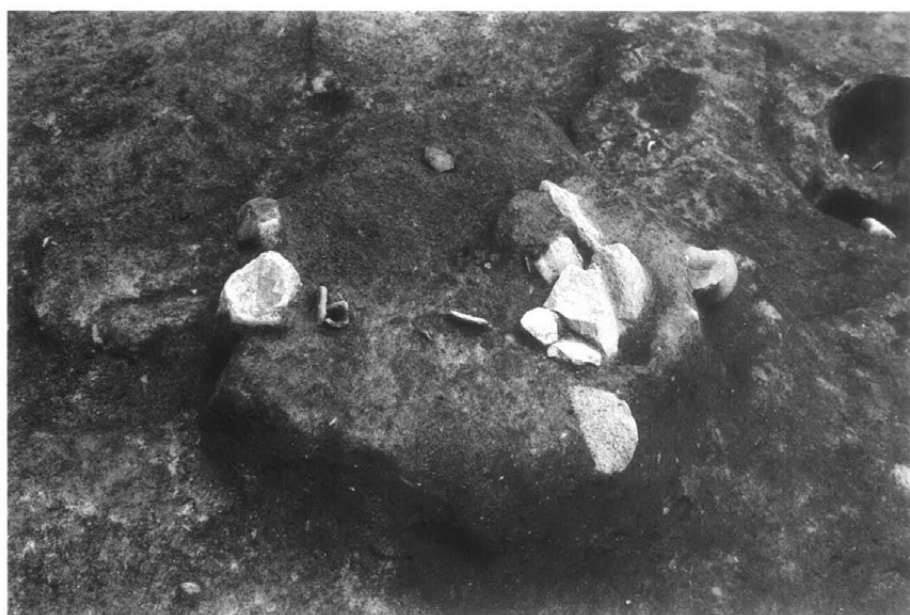
同 カマド・遺物出土状況



同 カマド



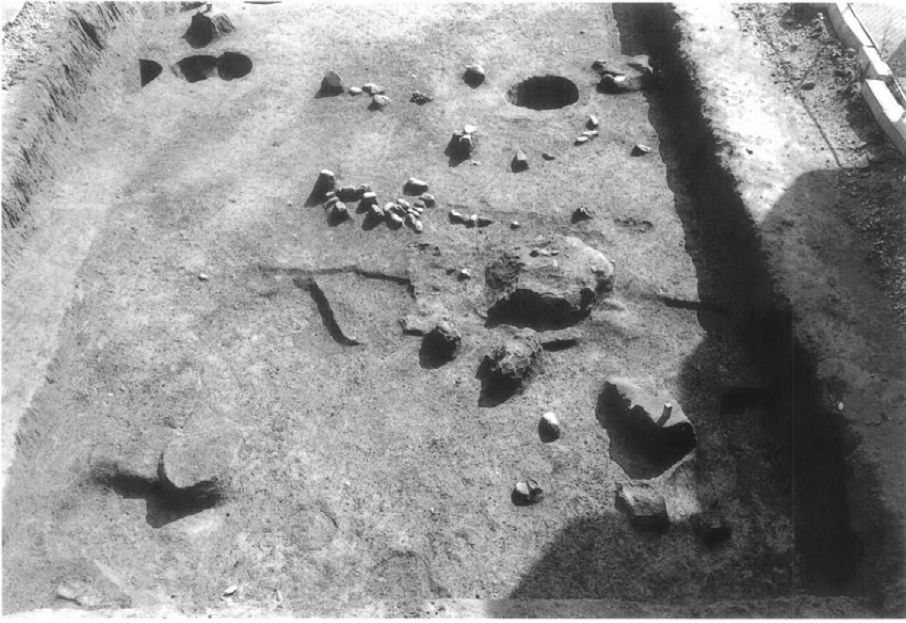
SB328(左)・SB329(右)



SB328 カマド



同 カマド断面



SB328(上)・SB329(下)・SI47(中)



SB329(左)・SB332(右)



SB332 カマド

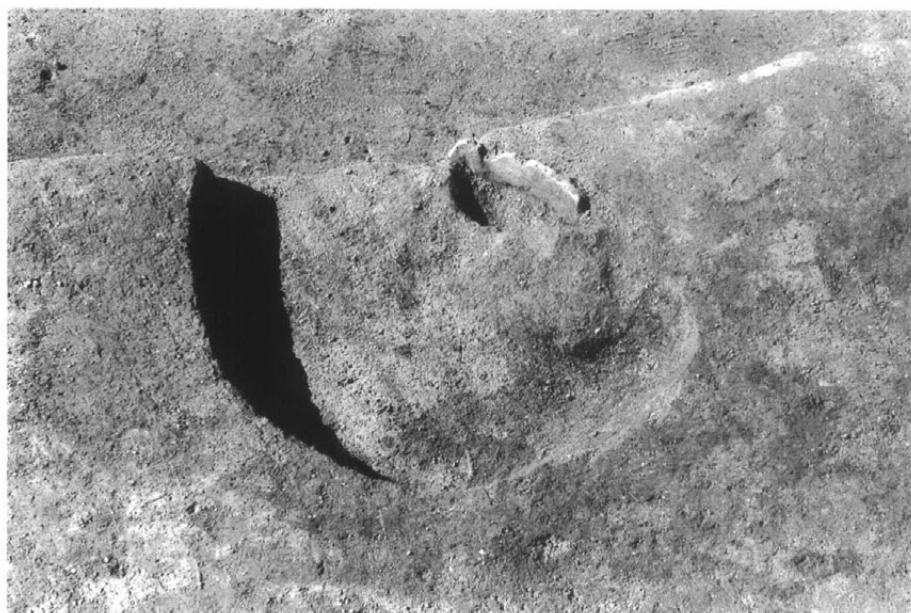
SB330

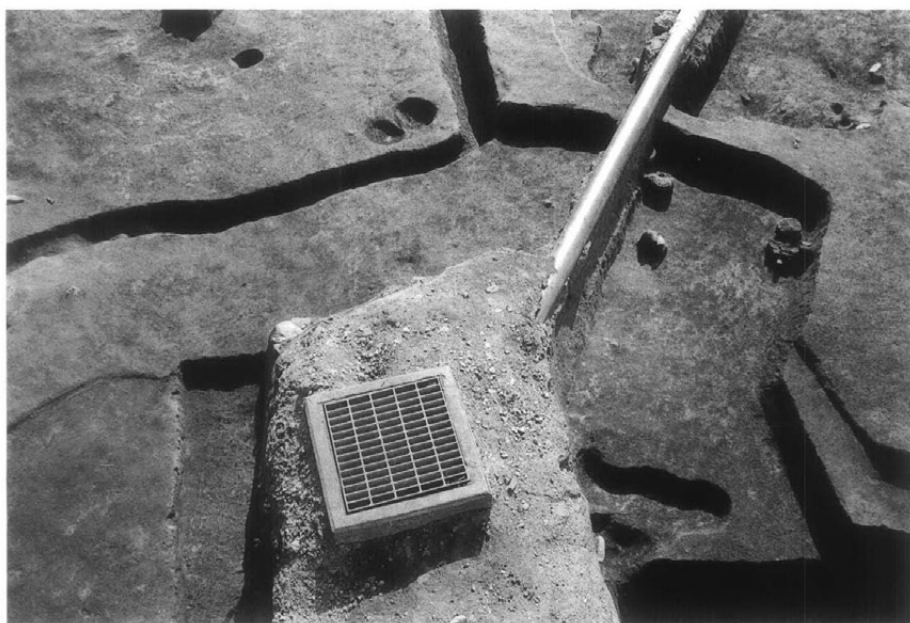


SB330 カマド



SB331 炉址

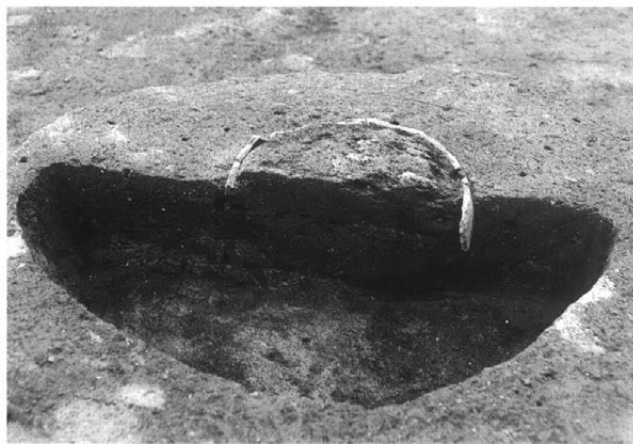




SB333



同 遺物出土状況



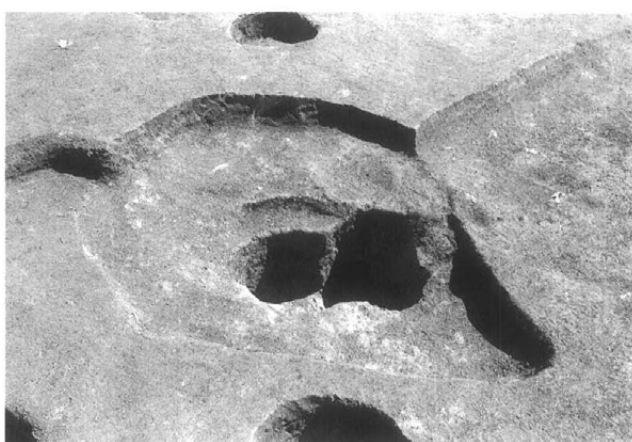
SK94 遺物出土状況



SK94



SK95



SK97



SK98



SK99



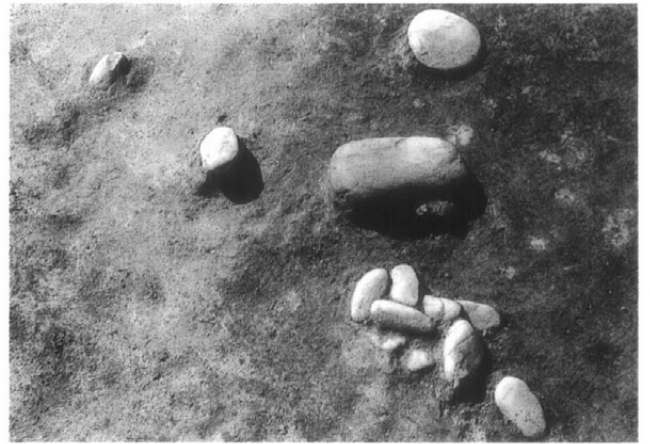
SK100



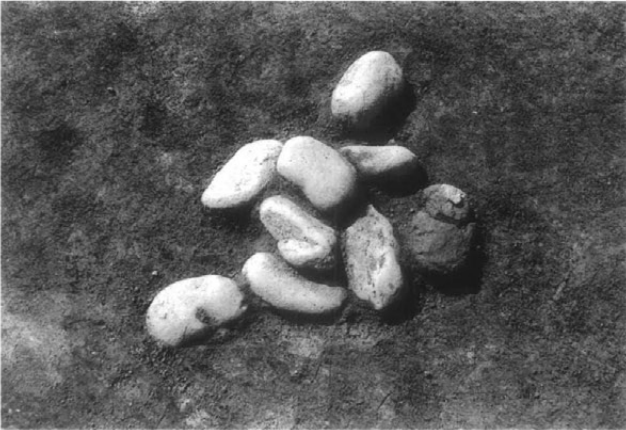
SK101・102



SI43



SI44



SI45



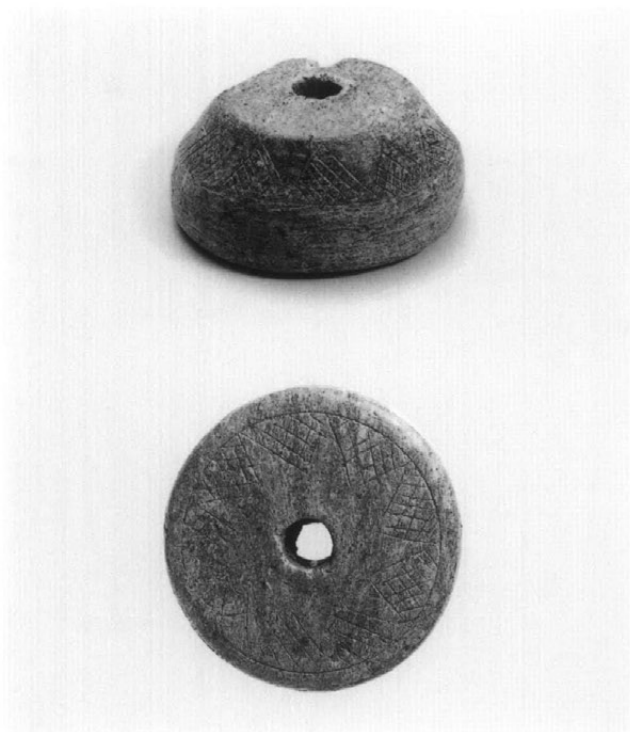
SI46



SM07



SB318



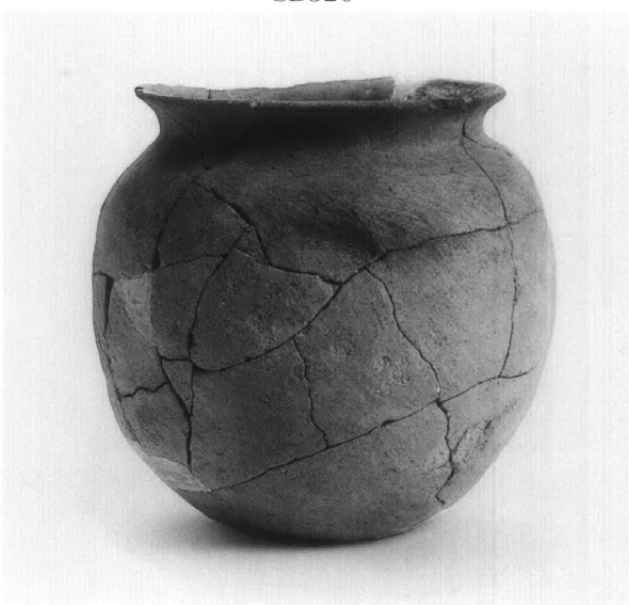
SB319



SB320



SB329



SB327



SB328



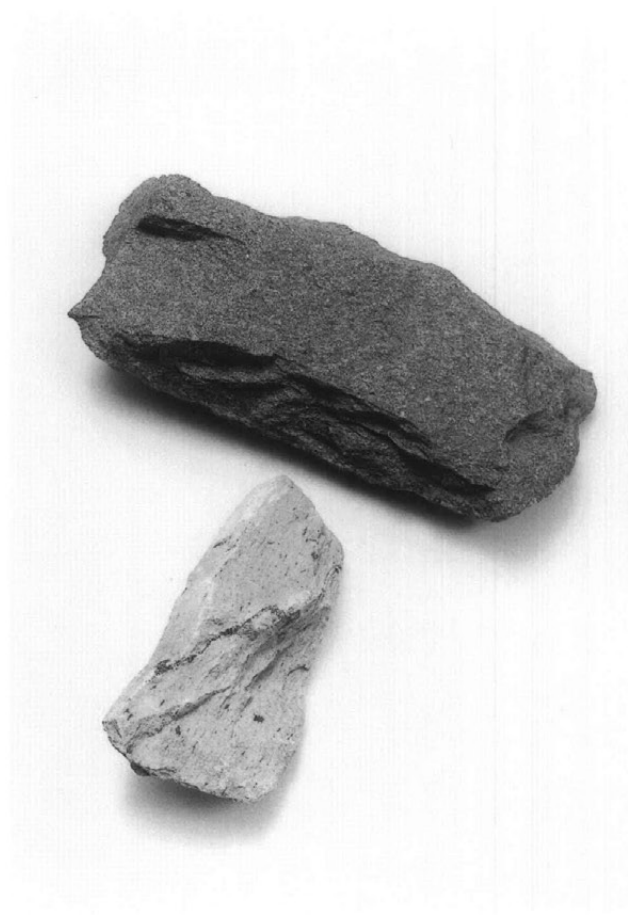
SB333



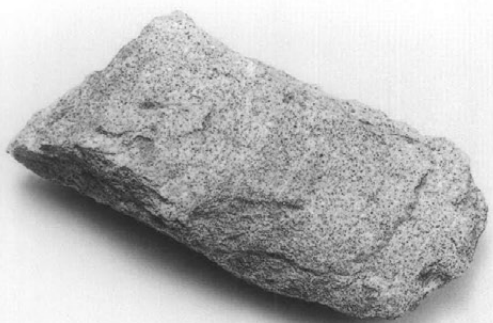
SM07



SM07



SM07



SK98



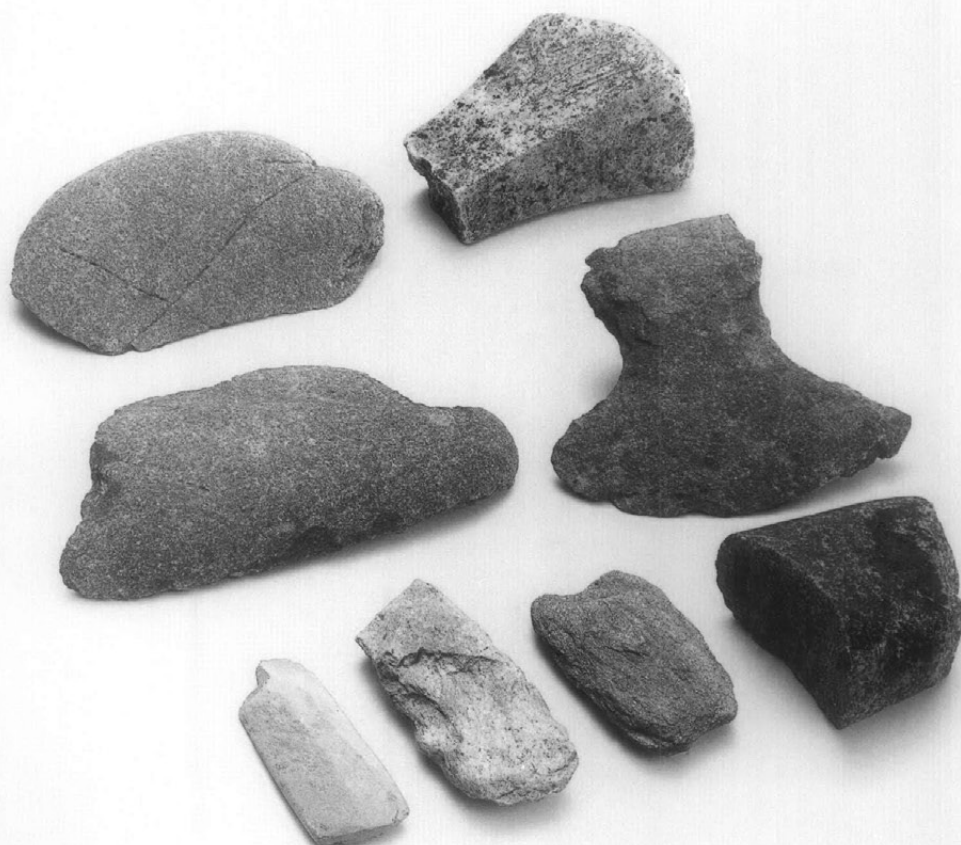
遺構外



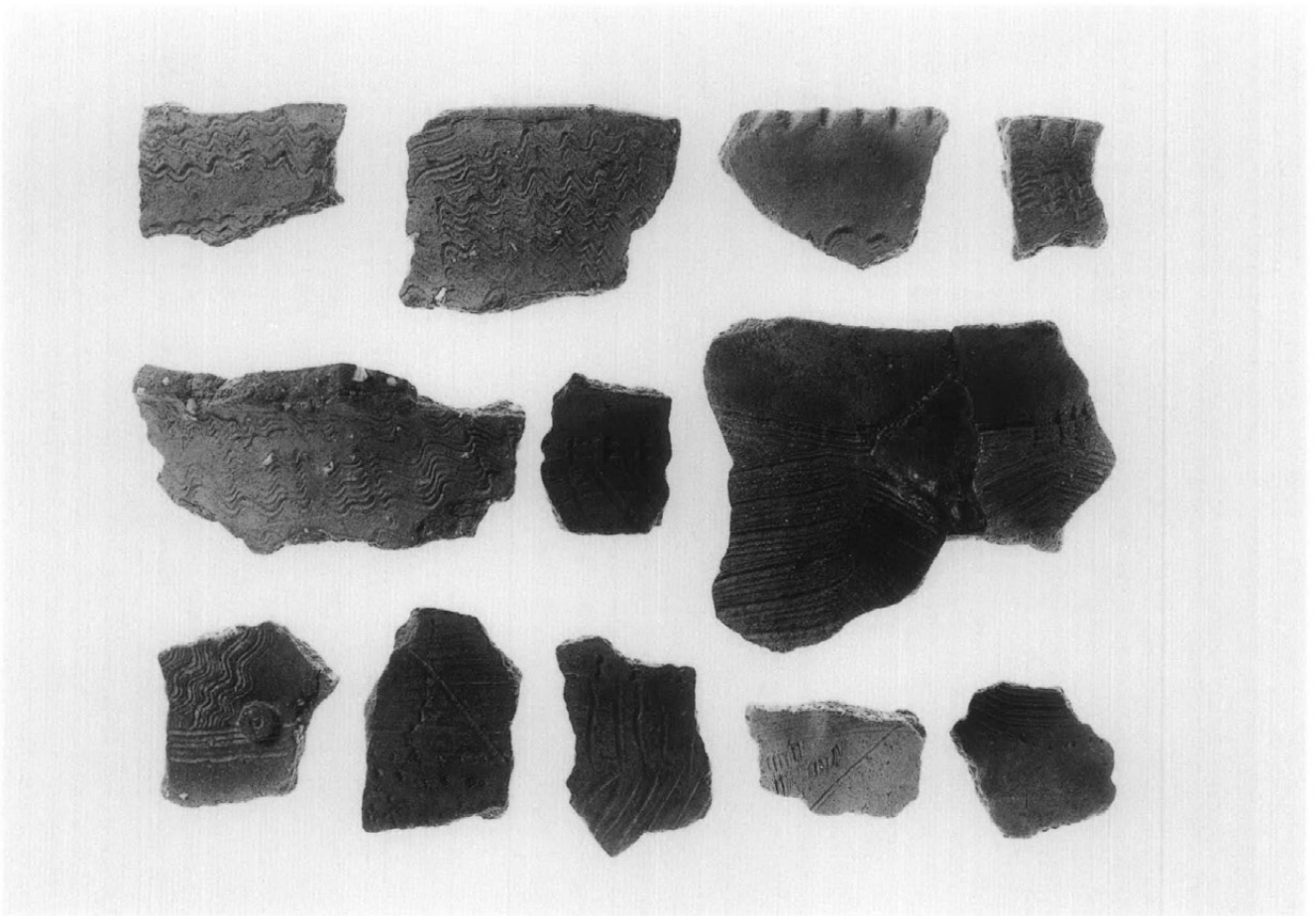
SI43



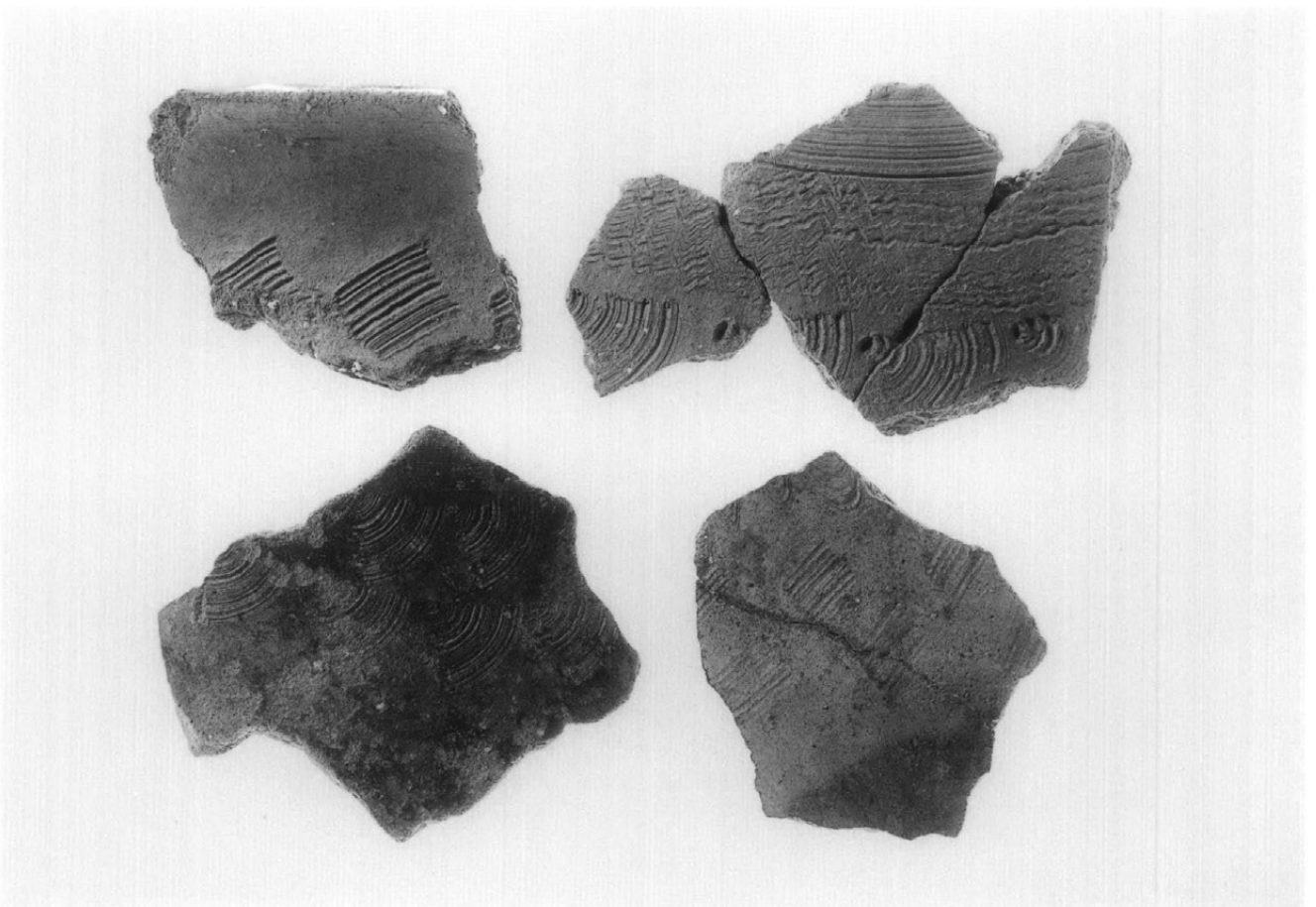
遺構外



遺構外



遺構外



遺構外



報 告 書 抄 録

ふりがな	ごんがいせきぐん(たなかくらがいとちせき)							
書名	恒川遺跡群 (田中倉垣外地籍)							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	澁谷恵美子							
編集機関	飯田市教育委員会							
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 TEL0265-22-4511							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ごんがいせきぐん 恒川遺跡群	いだしぎこうじ 飯田市座光寺 4604-2 ほか	20205		35° 31' 48"	137° 52' 19"	平成18年 8月28日 ～ 11月1日	207㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
恒川遺跡群	集落	弥生時代 古墳時代 平安時代	方形周溝墓 竪穴住居址 土坑・集石・溝址	弥生時代土器・石器 古墳時代土師器・ 須恵器・石製品 奈良・平安時代土 師器・須恵器 石器		弥生時代の墓域 古墳時代の集落域 奈良・平安時代の集 落域		
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・ 恒川遺跡群の田中倉垣外地籍は、基本的には集落域の一面とされており、今回の調査結果もそれを追認するものである。 ・ 今回確認された各時期の様相をみると、弥生時代後期においては墓域として、古墳時代から奈良・平安時代にかけては集落域であったことがわかる。奈良時代においては、北東側にある「伊那郡衙」との関連がある集落として位置付けられる。 							

恒川遺跡群(田中倉垣外地籍)

2008年3月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印刷 龍共印刷株式会社
